

第10回西成特区構想有識者座談会 議事録

日 時 平成24年8月21日（火）午後6時00分～午後9時05分

場 所 西成区役所 4階会議室

○事務局 皆さん、こんにちは。お暑いところどうもありがとうございます。

ただいまから西成特区構想有識者座談会を始めさせていただきますが、あらかじめ少しお詫び申し上げます。臣永区長が、冒頭から出席する予定をしていたのですが、ただいま24区長の打ち合わせ会議で市役所へ出ております。終わり次第こちらに駆けつけますので、ご了承をお願いいたします。

それでは早速、第10回の座談会を始めさせていただきます。鈴木座長、どうぞよろしくをお願いいたします。

○鈴木座長 どうぞよろしくをお願いいたします。

皆様、お暑いところ、今日も長時間でございますけれども、最後までおつき合いいただきますようにどうぞよろしくをお願いいたします。

本日のテーマですけれども、アートによる振興策と住宅まちづくり、商店街の活性化策、防災対策等についてと、かなり盛りだくさんの内容でございますけれども、防災対策と住宅まちづくりのことに关しましては9月15日にもう一回ありまして、少しそこで今日出なかつた議論をさせていただきたいと思っておりますので、今回と9月15日もあるということをご予定おきいただければというように思います。

それでは、今日もたくさんのゲストに来ていただいておりますので、大西社長のほうから順に少し自己紹介をいただければと思っておりますので、よろしくお願ひします。

○大西さん 数年前、水内先生と西成区のまちの現況というか、土地とか、あるいは賃貸住宅とかに关してヒアリングを受けていた者です。今回、一応そういったものの観点から現状をどういうふうに、いわゆる福祉住宅なるものがここで育ってきたというところを話させていただいて、今の問題点と、今後どうしていけばいいのかということについてちょっとお話しさせていただきたいと思ひます。

○鈴木座長 どうぞよろしくお願ひします。

では、雨森さん。

○雨森さん 大阪市立大学で都市研究プラザ特任講師をしております雨森といいます。

2003年より大阪市の文化事業としてBreaker Projectという地域密着型のアートプロジェクトを新世界、西成区の山王地区を中心に行っておりまして、今日は、そのあたりの活動のご紹介をしつつ、西成特区構想における振興策について皆さんとお話できればと考えております。よろしくお願ひいたします。

○鈴木座長 よろしくお願ひします。

では、上田さん、お願ひします。

○上田さん NPO法人こえとことばとこころの部屋ココルームといいます。上田假奈代です。よろしくお願ひします。

西成の山王、太子、萩之茶屋2丁目と拠点を3つ持っているんですけど、そのうち2つは動物園前商店街に、カフェとカマン！メディアセンター、そして萩之茶屋に支援ハウスのマンションの管理をしています。今日は、2003年からこのまちにかかわり始めた者として、表現とこのまちのことをお話しさせていただきます。

○鈴木座長 よろしくお願ひします。

○竹中さん NPO法人福祉のまちづくり実践機構の竹中といいます。

今日は、大阪市が制度として進めています民間老朽住宅建替支援事業について、西成で幾つか事例が出てきていまして、私は、株式会社としてはその管理をやっていることもありますので、幾つかのそういった建替事業の事例を紹介させていただくということと、あと、現在もそういったハウジングを提供している立場として、生活保護の方の受け入れだけで回しているのは非常にやっぱり問題で、住宅の質をどういうふう維持して、いいストックをつくっていくのかというふうなことをふだん考えているところがありますので、そういったお話をさせていただこうと思っています。よろしくお願ひします。

○鈴木座長 どうぞよろしくお願ひいたします。

それでは、あとはいつものメンバーでございますけれども、有識者委員の、私の左手から福原委員、寺川委員、松村委員、そして水内副座長、それからありむら委員、織田委員、原委員、そして私、座長の鈴木でございます。このメンバーで今後の議論をさせていただきたいというふうに思います。今回、ちょっと3時間というかなり長丁場ですので、どこかの間で5分ぐらい休憩を入れようかなというふうに思っております。

それで、前半は生活保護における住宅市場の現状とまちづくりというのを前半議論いたしまして、後半にアートによる振興策あるいは若者にとっての魅力あるまちづくりについ

てということで、ちょっと前半と後半で、お互い密接につながっておりますけれども、少しテーマを分けて議論をしていきたいというふうに思っております。

それでは早速、前半でございますけれども、まず水内委員のほうからご報告をお願いいたします。

○水内副座長 トップバッターでございますが、今日は副座長ということで、若干仕切りの立場も入らせていただいておりますので、全体として前半と後半に分かれます。今、鈴木座長が言われるとおりでございまして、前半は、どちらかという住宅そのものの今の西成区全体も含めてどのような状況にあるかということをも私の方から説明させていただきまして、それから大西さんのほうで、この辺、お詳しいということで、より深く、今、生活保護下でどのような形でまちが動いているかというのを話ししていただきたいと思っております。その後、竹中さんのほうで、より具体的な仕組みづくりも踏まえたアクションというのを紹介していきながら、今後どのような発展があるかということをしやべっていただくという形にしております。これが前半部でございます。

後半は、また改めて後で紹介いたしますが、アートというのをちょっと挟みながら、まちの再生を考えさせていただきたいというふうに思っております。

お手元の資料です。まず私の方から、15分から20分ということで、その後お二方いただいて、二、三十分ここで議論してみたいと思うんですけれども、まず私の資料から見ていただきたいと思っております。

めくっていただいて、西成区北部の生活保護と地域生活の現状から考えるまちづくりのあり方と。まちづくりのあり方も言っているかどうかわかりませんが、西成区北部という形で、今までのあいりん地域あるいは今宮中学校校区よりちょっと広げた形での状況をご説明させていただきたいというふうに思っております。

2のスライドの下の方をちょっと見ていただきたいんですけれども、これはちょっと古いんですけれども、西成区と一緒にやらせていただきました生活保護受給高齢者の生活実態という、1,249人調査というのを2005年にしましたが、それに基づいて幾つか知見を見て確認させていただきたいと思っております。

まず、地図を見ていただいたらわかりますように、これは、1アパートに10世帯以上生活保護の方が居住しているアパートの分布と考えていただいたら結構です。かなり広範に、もちろんあいりん地域にかなり密集しております。黒丸は簡宿転用のアパートですけれども、しかしながら西成区全体に広がっていると。

じゃ、そのアパートはどのようなものかという、円グラフが3つございますけれども、大きく言いますと木造の共同住宅と非木造の共同住宅というので3分の2を占めているという実態がおわかりいただけるかと思います。広さについても3畳、4畳半、6畳、9畳、大体この辺が拮抗しているというような状況とごらんください。居住水準は、水準以上というのはわずかに11%しかないという状況にあったということです。

次をめくっていただきたいと思います。3のシートです。

これは、初めてわかったことなんですけれども、西成区全体からしますと生活保護の増大というのはやはりあいりん地域での増加に由来するというふうにしてよく言われがちですが、実際はどうかということです。これは、受給している人がかつてどういう状況にあったかということで、野宿経験あり、あいりん地域経験ありというのをベースにしながら、あり・なしで4パターン出てきました。

右上のほうに「非野宿・あいりん」、野宿はしていないけれどもあいりん日雇い経験をした人が今生活保護をどう受けている、それから、野宿もしていない、あいりんも経験ないという方、それから、野宿はしているがあいりん地域の経験はないと。それから、野宿もあいりん地域の経験もあるという4パターンで分けました。萩之茶屋の連合町会で見させていただきますと、あいりん地域、右上と左上の円の35、41というのがありますけれども、これがあいりん経験をしている、あるいは野宿もあいりんも経験しているという方が多いとわかるんですが、例えば隣の長橋を見させていただきますと、やはりこれもかなりあいりん地域の経験者あるいは野宿の経験者の方が出ていると。下のほうで、玉出とか岸里のほうも出しておりますけれども、状況は、数はそう多くはないんですけれども、やはりかなり多くの方々があいりん地域あるいは野宿経験という方が西成区全体に今生活保護を受けて住んでいるということがわかるという、そういう地図でございます。

ですから、あいりん地域の方がどんどん西成区全体に出ている、これは事実であると。ここに一つの大きなこの10年の西成区を含む激変があるということは、後でちょっとまた大西さんのほうからお示しいただきたいというふうに思っております。

それから、家賃ですが、この間ちょっと4万2,000円で張りついているかという話があって、改めて大阪市全体と西成区を見ました。生活保護の住宅扶助額の分布というのを昨年の一斉調査の数を見ますと、大阪市全体では、いわゆる4万2,000円というのは白抜きの数字がそうなんです。42.4%が4万2,000円という、一つ単身の上限に張りついているということは確認できております。それから、大阪で公営住宅に住む人以外の単身

世帯を見たら57.2%ですね。これが西成区になると下にありますように66.4%、確かに高いんですけども、オールすべて全部4万2,000円に張りついているというわけではないですが、かなりの部分張りついていることは事実だということがわかりました。公営住宅に関しては、かなり生活保護の住宅扶助の分布は大きく変わります。

こういう実態で、その下に円グラフがあって、これは2005年調査ですけども、この時点で大体4万2,000円に張りついているのが半分ちょうどあったということで、張りつき感というのは3分の2、半分以上、6割ぐらいやっぱり張りついているんじゃないかなというのが今のストックとしての実感かと思います。ただ、新規でどうなるかということに関してはちょっとよくわからないところがございます。

それから、5のシートに移らせていただきたいと思いますが、生活保護を受給する前、どういう状況にあったかということなんです。上のほう、ホームレスと大阪府だけしか出しておらないんですけども、結構、ホームレス状況の方に今生活保護がかなり打っていただくことになっておって、全国で去年3万1,855という数字が出ておりますけれども、3万1,855の方がホームレス状態で生活保護を受けたということがわかっており、年齢分布を見ていただいたらわかりますよね。かなり若い方が、大阪府でも40歳未満が17.4、40から49歳が19.4と、多分この辺の方々の中身、中身という言葉はちょっと語弊ありますけれども、どういう方かというのが、今いろいろと世間を、とかくするとちょっと誤解もあるかもしれませんが、真実を突いているような状況が出ているのかもしれない。

行き先ですが、図表8を見ていただいたらわかりますように、大阪府がちょっとこの数字、よくわかんないですね。大阪府の出口が無料低額宿泊で33.0というのがちょっとよくわからなくて、これ大阪府なんですけれども、東京との大きな違いは、断然違うのは、一般住宅が東京は1.2%なんですけれども大阪は32.9%。忘れてならないのは医療機関にかなりの数が行っていると。ただ、愛知県の出方もちょっと異常であって、これ本当にちゃんとしたものかどうかわかりにくいんですけども、こういう実態があります。ですから、生活保護で、アパートだけに行っているのかだけではなくて、その他のさまざまな、生活保護を受けても必ずしも地域でアパートに住んでいない実態というのもちょっと確認しておきたいなというふうに思っております。

それから、5の下の方の棒グラフですけども、西成の方は生活保護を受ける前に、棒グラフに5本並んでいますけれども、特に病院経験者あるいは救護施設経験者というの

がかなりおられるということで、施設、特に医療機関を通じて、出た後に住んでおられるということも頭にとどめておきたいなというふうに思っております。すべてが稼働可で元気であるというわけではないという実態もあるということ、救護施設もそうかと思えます。出た後になかなかそうすぐ働ける人がいっぱいおるというわけではないということが実証されているんじゃないかなと思います。

6のシートにいきますと、敷金あり、敷金なし、保証人あり、保証人なし、これ2005年の調査ですのでかなり変わっていると思いますけれども、敷金なしや保証人なしのところに野宿・あいりん経験者の方はどっちかというところとそういうかなり入りやすいところにまず入っちゃおうという傾向があるというのが、このグラフで読み取っていただきたい事実でございます。それから、保証人なし、敷金なしのほうの住宅水準のほうがやはり低いということも出ていますが、これはどうも、大西さんのお話によると、必ずしもそうでないようなことも今起こっているというようなこともお聞きしております。

それから7です。ここも判断が難しいところなんですけれども、入ってこられる方の、いわゆる家に入った、やっぱりちょっと住んでいてしんどいな、いやここでもうずっと過ごすよという、いわゆる永住志向とかそういうのをちょっと聞いておるんですけれども、7の上のグラフ、一つだけございますけれども、転宅、転居しているかどうかというので、後でもお話があると思えますけれども、転居というのが大きな一つの流れになっておると思えますが、この時期でも22%転居があったと。さまざまな理由がございますのでちょっと見ておいていただきたいと思えますが、転居の理由はいろいろとありますけれども、住宅の設備や環境やそういうトラブルとか立ち退きというものもあるということで、音の問題というのはやっぱりかなりいてるなというふうに思いました。

ところが、永住志向というのが結構あるんですね。下の永住志向を見ていったら、居住年数は本当に短いというのがここの特徴であるんで、大体5年未満で3分の2ということなんで、ほんまについ最近地域に根づいてきた、ここも大きなポイントですね。やはり地域でどう受けるかというときの、地域とのつながりはもともとないと、民生委員がどうのこうのという話じゃないという世界であるということを確認していただきたいんです。

じゃだれがするのという話が出てくるんですけれども、ところが永住志向というのは結構あるということで、これを裏返せば、それほど住宅にこだわっていないということが後でわかるんですけれども、それはそれでいいのかなということとはちょっと考えないかんこ

とかなというふうに思っております。

それから、その下の8、いろいろと生活保護で失敗、成功があるという中で失敗事例がよく取り上げられるんですけども、この時点で過去の生活保護歴というのを聞いておまして、もう一遍とっているという方の割合が結構おられたので、その理由を聞いておりますけれども、意外と失踪とかそういうの、ここはちょっと、また生活保護を受けていますから、何らかの理由で生活破綻がまた起こり、もう一度生活保護を受けているわけですけども、失踪というふうな事例も若干ございますが、就労してという形で一たん抜け出て、しかしまたという形で戻ってこられる方もそこそこおられて、努力されている方もおられるという具合になろうかというふうに思っております。

ただ、余り見せたくない数字ですけども、ホームレスの生活保護で廃止の統計というのが出ておまして、大阪府でも失踪というのが30%を占めているという事実もありますし、就労でもかろうじて5%ぐらい、これ、その他というのがすごく多いので、余り当てにならない数字かなとは思っています。これはちょっと無視していただいたら結構かと思えます。

それから、9なんですけれども、あいりん地域に住んでいる人と、その外に今住んでいる人の居住の意識の違いって何かあるのかなということなんです。上の棒グラフであいりん地域外と地域内と、かなり、あいりん地域外に住んでいる方はやはり間取りや広さとか環境というのを優先して住宅を選択しているし、あいりん地域内の方は、人に勧められたとか敷金が要らないとか、そういう形で入ったということで、入り方が若干違うので、あいりん地域外の方のほうがより住宅の好みということに関してはある程度意識を出されておるんですけども、ただ、不思議というか、永住志向、居住の満足度に関しては内外余り変わらないという形が出てきております。どうも3畳一間というところで過ごすということの居住面積にかわる何らかの付加的・社会的サービスというのがかなりきいてくるのかなという感じもして、これが応援とか支援というあり方の独特のパターンが、この生活保護の、地域で住んでいる方の実態が見られるんじゃないかなというふうに思っております。

それから、10はかなり大胆な推計をさせていただいたんですけども、いろんな自立があるということをもう何度も言われていることですね。今回、さまざまな指標から、2005年9月の調査でどれだけの方が今直ちに就労できるかということ推計してみたいんです。となると、完全にこれは就労できるよという方は2%、福祉的就労でいけるのが

19%、ボランティアで32%ということで、ここまでは社会、地域とのさまざまな接点を持つ可能性が持たれております。ここで半分を超えるんですけども、社会的自立あるいは日常生活自立あたりで困難を抱えるという事例も、特に日常生活自立というところでやっぱり30%という形になってきて、ここにかなり西成のある種、息の長い生活支援とか、そういうのが必要であるという状況がわかるかと思えます。逆に言うと、中間的就労も福祉的就労やボランティアというところである程度受け皿もある。ただ、完全就労という形へ持っていくのがなかなか難しいというか、一旦生活保護をもらった高齢の方々についての就労のインパクトというのはちょっとしんどいんじゃないかなというふうな結果が出ました。

これが生活保護者の生活実態で、5年以上前の調査ですのでかなり実態は変わっていると思いますが、この辺はまた後で大西さんのほうから補足していただけるかと思えます。

それから次のほうは、一転がらっと変わって写真が多くなってきますけれども、じゃ今、西成の特にあいりん地域の隣接地域ではどういうことが起こっているのかということをお示ししたものです。

例えば、11のような住宅地図を経年別に並べてやりますと、かなり困難というか、A、B、C、Dの全く同じ街区でもこれだけ違うまちのその後があるということをお示ししたいと思います。

というのは、それぞれもともと意図があってまちづくりをやり始めたんですけども、西成の場合は途中でほぼ止まっており、その後のまちづくりのあり方というハーモニーがないということなんです。とにかく、その場その場のその土地のちっちゃい区画だけで何か動いているようなことがいっぱい起こり、同じ街区でも4つの違いのあるまちができていると。これがもう少し何か大きな流れの中でちゃんとその辺の開発というのを見通すことができないのかというあたり、これもお二人の専門家の方たちから提言いただきたいんですけども、こういう状況がございます。かなり混乱しております。

12のようにかなり多くの狭小賃貸住宅というのもありまして、これがまたそれぞれに応じて家賃水準が決まり、そこによって住むことも決まってくるというのがあり、詳しくは説明いたしませんけれども、今、写真でありますような形でそれぞれ、例えば13というあたりではほとんど、この場合では4万2,000円取るとはほぼ不可能なアパートがあり、現実、2万円台、3万円台の住居費で住んでいる方もおられますし、年金で細々暮らしてられる方もおられるというような実態が13になります。

文化住宅、これもかなり、もう2階とか1階、それから風呂あり、風呂なしで、ここもある種、生活保護のいわゆる単身ということに関しては、これを改造していくという形で今使われたりという形が起こっていて、いろいろ文化住宅のストックというのもしち枯れたところも結構ございます。元気なところもあるとは思いますが、そういう状況です。

それから15、マンション、これもなかなか難しい状況でして、後でも話あるかと思いますが、3階、4階、5階というあたりではなかなか生活保護の4.2万円というのは取りづらいという状況があり、じゃ何が一体生活保護の主流かというと、16、17のようないわゆる福祉アパートと呼ばれるような、初期型、後期型というのもあるんですけども、部屋の中に台所、ユニットバス、ベランダあるいはトイレというのが入っているというのが前提で福祉満額上限取っていきこうという流れで、かなりの年月が今たってきているんじゃないかなというふうに思っております。

17のように、もともと2階建ての文化住宅が上だけとって1階に変貌していくというようなこと、何か2階の建物が1階になっていくという今現象が西成のあちこちで起こっているんですけども、これは上下の音の問題とか何かで、やっぱりバリアフリーで安全やというのがあって、どんどん1階化していくと。改築で、この物件は多分接道とかいけたのかもしれませんが、そういうことも起こっております。

あるいは、18のように一戸建てがどんどんアパートに変わっていくというようなことも起こっているという、そういう状況になっております。

19、20、21、22というのは、これは簡宿のほうでございますけれども、簡宿もいわゆる福祉アパート転換型の典型的な事例を出しておりますけれども、21のようにまだ1畳とかそういうところもなきにしもあらずで、ここで生活保護ではないような方々の住居として確保されているという現状もございます。

そういう形で23、24というふうに移っていくんですけども、たまたまな形で今、西成の狭小住宅というのが生活保護というのをベースにいろんな努力というか、それに合ったいわゆるリノベーションをしていっているという状況もあり、実はこれが余り今まできちんと認識されていなかったところもあるんですけども、これを一体どういうふうにするのか、この現象をどう見たらよいかというのは、また後でディスカッションしていただきたいと思っております。

何が問題かとなりますと、25になりますけれども、15畳以下という、28平米というの

はワンルームの一番普通のところですが、大体15平米以下というのがあいりん地域、西成もそんなのが多いんですけれども、今までの方々のさまざまな生き方を見て、3つの円がございます。3つ目の右下の家政提供者というところが、今までは家族であったことが多いかと思うんですけれども、西成の場合は家政提供者というのが決定的に欠如しております。単身で長いこと住んでおられて、就労しているときには別に構わないんですけれども、これが地域生活になった場合、自分の家政生活、食べること、寝ること、着ることをどうするかというあたりで、病気のケアはどうするのというときに、ここが不在というときにさまざまな今サービスが入ってきて、これが家つきとか、囲い込みというような言葉もあります。食事つきとかいう形で今どんどん入っていくんですが、いわゆる介護とか福祉の本流以外の方で、生活保護だけでこれをやろうとすると対価が出てこない。この家政提供者をおせっかいで出している人の対価はどこから出すのかというのが今一番問われているところではないかなというふうに思います。

26で、これもまだまとまり切れていないんですけれども、ハウジング経営のいろんな見方としたときのポイントというところで、家政費というのが一番何とも適正ラインが不明確だなということを書いております。

それから、27、28、29は小さい字ですが、これは、前聞き取ったときの不動産屋さんのご意見を聞くと、不動産屋さんは今、もうほとんどかなりの部分が家政サービスということで、みずからの業務の一端を出しておられるなということがわかるという意味で、ちょっとランダムに、これもっと整理しないといかんのですけれども、並べているという状況でございます。

じゃ、家政サービスの応援対価というのはどっから出してくるのという話も全然まだできておりませんし、あくまでこれは不動産業者の管理業務だということになれば、それはそれでそうかもしれないんですけれども、なかなかそうも言っていないボリュームにもなっているんじゃないかなというふうに思います。

時間が来ておりますので、あとは30のところは、うちの都市研究プラザの研究者がこの現実に対して、この方々は住宅建築系のまちづくり系を専門にしていますが、そのご意見というのを30、31、32、33に載せてあります。これは、特に31、32あたりは西成独特の今までの家賃経営とは異なるような前提で動いているということで、特に32あたりが重要かと思っておりますけれども、賃貸住宅管理業の業務範囲、これが、今までモノとカネプラスヒトと生活まで至っているというのが西成の非常に特徴なのかなと。となってくると、

大家の責務の明確化と市場を生かした居住サポートというのが非常に重要になってくるのではないかなというのが佐藤さんの結論となっております。

それから、34からは米野さんという、これも建築というか都市計画というか建築計画の方なんですけれども、今まではこういう入居が制限される低額所得、高齢者、障がい者、外国人、母子等、ホームレス、貸したがらなかったというところがあったんですけども、37に飛ばしますけれども、西成区の場合、居住支援のための公的制度・事業がなくても住宅弱者が入居できるようになっているということで、入居者、家主、不動産店、住宅という4つのトライアングルの中で、リスクを承知の上で入居を拒まない家主が多数派、データベースなどなくても入居できる物件はたくさんあると。入居前・入居後の支援を結果的に行っている不動産店であるという、こういう状況が今の実態かというふうに思っております。

今日は前振りという形で最初ちょっと説明させていただきましたけれども、この辺は僕、大西さんとか西成のいろんな不動産屋に聞き取りをした中で暫定的にまとめたものでございまして、一番よく情報を提供していただいた大西さんのほうに次、振りたいと思いますので、よろしく願いいたします。

○大西さん まず、この間水内先生にいただいた資料から、西成区内の生活保護世帯、受けておられる方の就労・自立困難な高齢者等が80%以上超えているということなんで、まず、この方々のあいりん地区外の地域のケースについてちょっとお話しさせていただきます。

バブルがはじけたぐらいから多分お話ししていかなければならないと思うんですけども、大体、平成元年秋ぐらいから兆しが見られたバブル経済の崩壊ですが、平成2年春ぐらいの総量規制によって決定的な話になります。このころには、まだ福祉住宅とか福祉アパート等の呼称は存在しなかったように思うんです。ただ普通に文化住宅とかアパートがあって、そこに生活保護の方が住んでおられたという実態があるだけで、特別ここのアパートは皆さん生活保護ですよというようなことはなかったと思います。というのは、この当時の生活保護受給者の多くの方は保護世帯であることを隠したがる傾向がどちらかというところがありました。景気もよかったということもありまして、周りも若干差別的に見るところがあったように思います。

その後、バブル経済が崩壊して経済的なダメージが来ますと、多少なりとも収入増を目指す家主さんたちは生活保護世帯の住宅扶助費に注目する、こういう人があらわれてきま

す。例えば6畳・3畳・キッチンつき、風呂はないけれどもトイレがある文化住宅に保護世帯の方が3万円で生活する。ところが、このときの住宅補助の最高額、仮に3万5,000円やったとしたら、ほんなら3万5,000円に上げてあんな懐は痛まへんやろということで、そういう人たちの賃料を軒並み増額していくということが起こりました。さらに景気が悪くなっていくと生活保護世帯がどんどん増加してくると。そうなってくると今度、需要と供給のバランスが崩れて、これは需要がたくさんあるぞと、建てていこうという形でこういったものを建て出すと。ただし、賃料の計算から逆算してそういうものを建てていくということになるので、いわばタコ部屋みたいなものでもいいんじゃないかということで、多くのこのとき建てられた建築物というのは、例えば建築基準法を犯すものが存在していたり、それから品質も、賃料に比して当時としても低いものがたくさんありました。

こういうときに初めて福祉アパートとか福祉住宅というのが、いわば事業者側から後づけでできた呼称であって、決して生活保護世帯の方に配慮した住宅提供というもどでつくられたものではなかったという、だから今、先生おっしゃったように、いろんところでそういうのが乱立しているという状態になっていると。こちらの先ほどのお部屋の写真を見ていただいても、初期のものというものはどういうものか、後期のものはどういうものかというのが出ていると思います。

一方、あいりん地区においてもバブル経済崩壊後、当然不況の波が訪れています。あいりん地区では、日雇い労働者なんかがお住まいになられている簡易宿泊所が林立する地域であったんですけども、そうなってくると仕事がないので当然家賃が払えないと。多くの方というのは別に日銭で払っているわけじゃなくて、3カ月先とか何カ月先とかいう形で一括で払って、そのときまでいてるというパターンが多かったように思います。

ところが、そういう人たちも今後生活ができなくなってくると。そうすると、家主さんとか宿主からしてみたら、出て行ってほしくはないけれども出ていかざるを得ない状況になってくる。ほんなら、同じようにここでも生活保護というものに目をつける人が出てきます。

だから、あなた仕事がないんやったら生活保護を申請したらと、そういう形でそういう人たちをまず外に出ていくのをとめると。その後は、今度はあいている部屋を埋めていこうと。NPO法人さんなんかを結局頼って、どんだんうちのほうに入れてくださいと、ついては中にはお礼をしますという形で入居をあっせんすると。もちろんこのときには、簡易宿泊所では生活保護というのは受けられないので、登記を例えば旅館から共同住宅に変

える、ホテルの看板をおろす、電気工事なんかで子メーターをつけていくとか、初めにちょっと初期投資は要るんですけどもそういう形で、実際僕は一番初めにやられた方を知っているんですけども、その方がやられて成功すると。ほんだらこれを見た方が、またどんどんまねして同じような形でしていったというのが現状です。大体これが平成11年、12年ぐらいやったような感じもします。いわゆる福祉住宅アパートについては、しばらくこの状況で大体経過していきます。

そのうち、今度、福祉住宅の需要が供給を下回り始めるという現象が起きます。どんどん皆それに乗かって建てていくなり改修していくなりしているわけですけども、そうなってくるとお客さんの取り合いが今度、家主さんの間で始まります。お客さんの生活保護世帯者のほうも、自分たちが重要視されているということに気づく方も中にいらっしゃるわけです。そうなってくると、おたくどこに住んであげるから、例えばテレビをつけてくれ、自転車をつけてくれ、冷蔵庫をつけてくれというような要求も出る。それで、勘のいい家主さんは、私ところはこれだけつけますよというような逆転現象も起こってくると。悪質な方になってくると、住宅扶助として出されている金額から一部キャッシュバックをするような、それは本来あってはならないことなんですけれども、そういう方もいらっしゃるかなのようにお聞きしております。

こういう状況になるとあらかじめ予測しておられた方は、それなりの建物をあらかじめ建てて、数年後こうなるやろう、だからうち是一般の方でも入れるような建物を建てて、なおかつ生活保護の方を重点的に入れていくという形をとられた方は、今に至っても空室というのは意外と少ないという、そういう家主さんもたくさんいてはりました。

今の現状というのは、新規の入居者というのは余りいらっしゃらなくて、これはあちらこちらの賃貸専門業者に聞いてもそうだったんですけども、大体、現受給者の移動、要するにもうちょっと広いところに行きたい、上がうるさいからトラブルになるとかという形。あと、当初は3階とか4階とかエレベーターなしのところでも生活保護を受給できたんですけども、そのときに受け入れたのが、足が悪くなってちょっと下においてこなあかんと、どうしても1階じゃないとだめや、2階じゃないとだめやという方が1階、2階を探すと。先ほど2階建ての部分の上を切ったというのは、別に要らないとかということでもないんですけども、もう平屋でいいやろうと、2階以上では福祉がおりひんと、だからあらかじめそれを見越して平屋にしているというだけの話です。上をつくって、それだけのコストをかけて入居者をとれないという、そういう計算のもとで平屋を建ててい

っているという現状があります。

今はそういう経緯でずっと来ているんですけども、結局、じゃ何が今問題になっているかという、例えば6畳一間、風呂なし、トイレなし、トイレ共同、炊事場だけついているような部屋で生活保護を受けておられる方が、例えば2万円とかそういう方もいらっしゃるし、先ほどの普通の風呂がついてワンルームみたいなところで4万5,000円の方もいらっしゃる。同じ水準のものであってそういうふうに値段が変わるのであればこれはこれでしょうがないことやと思うんですけども、実際には、例えば一部でもあるのかもしれませんが、ああいう3畳一間のワンルームで家賃が4万2,000円と。ほんで片一方は普通の部屋で4万2,000円と。何で同じ家賃でこんだけ物が違うんかという、こういう品質と賃料のアンバランスさという、この辺も一つ問題になるかと思えますし、それともう一つ、デフレ下でほかのもの、例えば土地の値段も下がっている、近隣のいわゆる普通の世帯が住む住居の賃料も下がっている、そういう中でなぜか生活保護の住宅扶助費というのはずっと上がってきていたんです、ここしばらく、ついこの間まで。一番高いときで4万3,500円か4万2,800円、何かそれぐらいまで上がって、一回一段落下がって4万2,000円に落ちついているんですけども、なぜ今までそれがずっと上がり続けてきたのかと。これも一度、もし上がってきた年々のその経緯を見てもらったらわかると思うんですけども、その辺もちょっと不明瞭というか、一体どうなっているのかということもあると思えますね。

あと、実際、住むところの品質の上質なものを、悪いものというものを僕らは勝手に決めていますけれども、例えばあいりん地域のそういう感触が好きな人というのはやはりいてはるんですよ。もうちょっといいところに移ったらどうと言うと、僕はここがいいんやと、この空間が好きやとかと言ってそこにいてはる人もおれば、いやいやもっといいところに行きたいと。中には、例えば共益費込みで5万5,000円の普通の1DKの一般の方が入られるようなマンションがあると、ここにどうしても入りたいんやと、おれは悪いところに住みたくない。どうするかという、家賃を4万2,000円にして共益費を1万3,000円にする。そういう形やと保護の請求が通る。その方は自分の生活費の中からその足らず分を、しんどいですがけれども補って生活して、それはそれで満足した居住空間を得ているという、そういう現実があります。

だから、どういった生活水準というのがいわゆる生活保護世帯の基準やというのが全くわからない状況、そういったことがいろいろな問題あります。

あとは、住宅扶助費の不正な使用というか、要するに家賃を払わない、使い込む、請求しても全然相手にしてくれない。最近では福祉課のほうに問い合わせして対応してくれるようになりましたけれども、以前は、生活保護というのは本人にあげるものやから、本人がどう使おうが福祉課としては知ったこっちゃないというような時期も実際ありました。あと、個人情報も教えられへんからとか、そういうことで対応していただけないということもあったというふうに聞きます。

結局、じゃこういっただけを解決するためにはどうしていったらいいのかということなんですけれども、まずやっぱり基準となる住宅というのは一体どういうものかというところをある程度つくっていくということも大事じゃないかという気がします。これが生活保護世帯、単身者高齢者用の住宅であるというように。こういう話は多分数年前にしていると思うんですけれども、いずれ規定していかなあかんという話は。

あと、これは勝手なことになるんですけれども、今、大阪市さんが市有地をどんどん公売にかけてはるんですけれども、例えば西成区でいうと長橋とか出城、南開とかあの辺で大型の市有地の売却、公売がここ何年かの間でばんばんとされました。買われてらっしゃる方というのはいわゆる建て売り住宅を目的とする開発事業者であって、何が起きているかという、公売にかけられるために土地の値段が下がっていつている。当然、その大型開発地だけじゃなくて、混在したところにちょぼちょぼとたくさんのそういう建て売り住宅用地というのがあります。ところが、それがもう売れないような状況になってきた。大阪市さんが極端な話、そんなことをしなければ、もしかしたら中のところが売れていったかもしれない。ところがどんどんそういう形で急激に売却にかけられるので、地価の下落が多分、今も始まっていますし、まだこれから相当進むんじゃないかという気がします。

だから、そういう土地を何とかこういった事業の場に使えないのかと。使うことのほうが、全体としてトータルとして西成区を福祉のまちとして何とか有効に利用できるんじゃないかとか、そういうことも含めてトータルで考えていかないと、なかなか、細々したことに対応していくだけでは、このまちのイメージか何かを変えるというのはちょっと難しいんじゃないかというような気がします。

僕がお話しするのは以上ぐらいです。

○水内副座長 ありがとうございます。また後で、質問等々させていただきたいと思います。

では次、竹中さん、よろしくお願ひいたします。

○竹中さん 私のほうは、資料のほうでますみ荘物語、これパンフなんですけど、できてちょうど10年になります。ますみ荘という築30年以上、かなり老朽化した木造アパートを建てかえて賃貸住宅にした、多分大阪市で一番最初の民間老朽住宅建替支援事業の事例になると思います。当時、建設後に、こういった事業をどんどん使ってほしいという思いがあって、でき上がってきたプロセスと、その後の事業の使い方、ほかにも、障がい者のグループホームにテナントになってもらったりとか、そういった住居コンプレックスとすることで、賃貸住宅単体では、複数のオーナーさんの共同建てかえではなかなか、うまくいかないというようなこともあって、そういった経緯をご紹介するためのパンフをつくったわけです。もう部数がほとんどなくて、皆さんにお配りするものがご用意できなかったのので、前半にそれをつけています。

こちらを踏まえて、高齢者多住地域の住まいづくりというところを、資料に基づいて説明させていただこうと思っています。

○水内副座長 大分後ろのほうですね。

○竹中さん そうですね、かなりめくっていただいて、ますみ荘物語は、これ自体の事業の説明は、僕よりも詳しいコンサルの方とか、また設計相談とかいう形で受けられます。西成でますみ荘の建替えにより増井マンションというのができて、今年で10年になります。ここで紹介しているのは一番新しい事例のアジュールコートを加えて4事例ですが、それ以外にも協調建てかえなどの事例もあって、我々がまちづくりを通じたハウジングとして協力をしながらやってきたのが7棟ぐらい建っている状況です。この中で増井マンションから少し説明していきたいと思っています。

現在増井マンションの管理は大西社長の会社でやっていただいていますし、我々も実はこの1階に会社を設けていまして、まちづくりの一つのシンボルみたいなイメージでとらえています。

一番特徴的なのは、家賃補助制度です。さらに従前の長屋に住んでおられていた方が建設中に、一時的な仮住まいのできる建物の建設もプロジェクトとして組み込んでこの事業をやってきたのですから、大阪市のほうでつくっていただいた家賃補助制度によって、従前の方が、家賃が上がっても戻ってこられるような事業の枠組みができあがりました。

次に、コミュニティハウス萩を説明させていただくのですが、これができる前に増井マンションのすぐ近くにブランコートという、若いファミリー向けの住宅を私たちの会社として建設しています。2000年当初、西成で福祉アパートがかなりの主流になってきてい

て、そういった中で収益性だけでなく1つモデルになるものをやりたいということで進めました。ブランコートも大西社長の会社で当初の管理をご協力いただきましたし、この10年近く具体的な西成の現場の中でいろんな経験を私たちも学ばせていただきました。また、建替支援事業にのっとった住宅づくりというものを、広くいろんなオーナーさんに知っていただくということも取り組みとしてやってきています。

ブランコートを簡単に説明させていただきましたが、次に、コミュニティハウス萩の説明をさせていただきます。こちらは新今宮駅の真ん前に建ってまして、労働センターの反対側、ちょうど線路脇の皮一枚がまだ西成区というエリアに建つ10階建ての鉄骨造のマンションです。こちらができたのが2009年で、増井マンションからは7年ほど間があくのですが、ちょうどこの時期は、こういったことをやりたいと言っても大阪市のほうも当時は熱意が冷めているというんですか、そういう時期もありましたし、今またやれるような機運になってきたと思いますので、ぜひ皆さんにも取り組んでいただきたいと思っています。

コミュニティハウス萩というのは、住居コンプレックスという意味では、福祉法人の協力で、1階、2階に通所サービスと介護事業所に入ってもらい、3階より上は単身者向けのワンルームとなっています。住宅の面積基準の25平米というのは建設基準として最低限と言われていますが、公的な補助が入ると25平米以上なくてはだめなんです。このマンションはそういった適用をそのときは使わなかったんで、銀行の融資等ではいろいろと苦労しましたが、18平米という本当にシンプルな間取りになっています。お風呂と洗面と便所が一つのユニットで、あと6畳一間というワンルームです。25平米というのは、高齢者向けということだけではなくて、労働者世帯の水準としてもやっぱり欲しいのですが、18平米ぐらいで、4万2,000円の家賃というのがすごく事業性が高いというんですか、戸数も48戸が積めましたし、そういう中での18平米というのは意外に西成区内で古いマンションでもそういった形での住宅を提供されているところも多いですし、高齢者、単身者でも最低限住めるという形でそこその水準にはなっています。

この建物は、今でいうサービスつきということをあえてやっていません。家賃設定も共益費のほかに、水内先生も言われた家政的なことに対する費用を取ってのサービスというのはなかなかそぐわないという考えがありました。管理会社と入居者と、あと支援する人たちがうまく連携しながら釜ヶ崎の真ん前に立っているこのマンション、面積は18平米とそんな大きくないですけども、生活保護の費用でこういうのも選べるんだというの

をやったりやりたかったというのがありました。それと同時に、サービスで囲い込むということではなくて、できるだけ入居者が自主的な形で住まい方に参加してもらえないかなという、そんな思いも込めて、かかわりを持っていただいている複数の社会福祉法人の担当者と管理会社と、入居者の代表みたいな形で住人の若い人にも入ってもらった事務局会議を定期的にやっています。支援を具体的にやるというよりも、高齢者の方が低血糖で意識がなくなったような状況をたまたま発見して運んだときに、緊急通報なんでもとこの事業では予算にも入れていないですし、それが必要ということよりも、まず18平米で4万2,000円でこういう水準の家もありますよという提案だったものですから、具体的にそういう方が出てきてどうしようかというので、法人の方とも相談して、大阪市の緊急通報で、連絡員というか、協力者を1名付けないといけないんですけども、入居者がそういう役割をお互いでやり合う形の緊急通報電話を設けてもらうというふうな、そんな手探りをやりながら運営を今やっているマンションです。

次に、アイビスコートという、これは2011年にできたアパートなんですが、高齢者専用賃貸住宅という事業を使って社会福祉法人によってつくられた建物です。こちらは、逆にそういった入居者に対してのサービスというものを社会福祉法人が社会福祉事業とは別にどんな形でできるのかというのをかなり検討されて、そのときの実際の企画・建設プロセスをプレゼンするための資料をつけさせていただいています。まちづくりエンアパートメントというちょっと変な名前が、入居者のエンパワーメント、みずから元気になるような、そういうエンパワーメントとアパートメントのごろ合わせというかかけ合わせて、縁とパートイコール役割を持てるような住まいづくりという提案となっています。

今は、サービスつき高齢者住宅という制度に変わり、社会福祉法人の登録で運営されていますけれども、私の会社では管理をやらせてもらっています。

1階にテナントとして、うどん屋さんが入り、それ以外は1階に法人のケアプランセンター、2階と3階が認知症のグループホームという構成になっていまして、4階より上が高齢者の住宅になっています。

一般的に考えられる要介護の高齢者で特養の待機者を受けようという高齢者向け住宅とは全く違う考え方で、元気なお年寄りに入ってきてもらいたい。仕事ですとか遊びですとかそういったものをサポーターさんが応援して、それでやっていこうというそういうコンセプトなんで、専門家の方が見に来られても、上が普通のマンションですので、これが高専賃なのというふうな形でびっくりされます。食事提供も、法人がやっている地域の配食

サービスを紹介することはあっても、法人が食事も含めた形で高齢者にサービスを提供するのではなくて、年金の方が水道料金の減免申請に行くのに1人じゃ行けないから一緒について行ってあげるとか、ちょこっとしたことを少し手助けしてあげたらまだまだ元気になれるという、そういう考え方で運営されています。

ただ実際には、途中でなかなか埋まらなくて、需要を見誤ったという反省もあって、要支援だけではなくて、要介護1、2、3ぐらいまで下げて受け入れています。もともとは家賃が4万8,000円と共益費が6,000円、かつ、生活支援サービスというサポーターの人件費と、屋上菜園や集会室、1階にもちょっとした散髪ができてQOLを上げるような部屋を設けたりという、共有スペースも結構ふんだんにとっていますので、その分7,000円いただいて、家賃プラス共益費が6万1,000円という額になっています。生活保護の方はそもそもそれにはかからないということになります。法人は、当初から西成の中での高齢者の生活保護が60%以上という状況で、それぐらいの比率の受け入れのための生活保護減免ということを考えていました。家賃を4万2,000円に減免し、共益費は同じ1万3,000円かかりますが、1万3,000円は生活費のほうで払っていただかないといけないんですけれども、ケースワーカーさんも、入院のときどうするんですかとか具体的な話をされます。入院時は生活費の7万円ぐらいが2万3,000円ぐらいに下がってしまうらしいんですね。西成区に相談したときには、支援サービス7,000円は入院時には取りませんと、だから、6,000円の共益費については生活費から負担してくださいという形で生活保護の方を受け入れしました。実際には80%を超える生活保護の方が入っています。

あと、いろんな細かい具体的な話は結構いろいろあるんですけれども、「新たな取り組み『社会住宅+地域+福祉』」ということで、一番最後、写真と、名称アジュールコートということで、これが増井マンションからちょうど10年たったこの4月に完成したものです。商店街の東西軸となにわ筋という南北の都市軸との結節点に当たる場所にできたマンションで、こちらも社会福祉法人が2階、3階をサテライト型の特養という形で、我々と社会福祉法人と、賃貸をやる会社と社会福祉事業をやる法人という形で、特養がセットになっている、ちょっと変わったマンションです。

そして、先ほど少しだけ説明しました配食サービスを15年以上前から地域でやっていた法人が、社会福祉施設の中の厨房を使って配食事業をやっていたので、今回、マンションができるときに1階のテナントとして入ってくれるということを早い時期に言っていただいて、そこで給食センターみたいな機能を1階に設けて、ロゴを入れた配送車を用

意して地域に弁当を配って回るという事業をやっています。これは、知的障がいの方を雇用しながらやっている事業でもあります。

4階より上のマンションについては、これも今後、私も議論の中でいろいろ話しをさせてもらおうと思っているんですけども、家賃が5万円と5万4,000円なので、4万2,000円から結構離れています。だから、先ほど大西さんも言われたみたいに、かつて3万円とか2万円とかという物件でも、福祉を使って4万2,000円になってきているし、我々としては住宅ストックとしていいものをつくっていかないと、単に高齢の生活保護の方向けの市場で住宅をつくったのでは、やっぱりまちとしていびつになるだろうと思います。今回のアジュールコートでは、母子家庭のおかあちゃんは住宅扶助が、5万4,000円出ますので。ちょうど子どもが小さいときにこのマンションで生活保護というのはうまくいきます。单身の方については、現時点では生活保護の方を具体的な受け入れの中で決断できていないので、家賃を4万2,000円に下げるというふうに先々決めるつもりなんですけれども、その場合にはやっぱり8,000円からそこらの費用を一民間企業が負担するという覚悟を持って、空室リスクとの比較の中でやろうかなと考えています。

だから、先ほどの民間老朽の制度を使うということであるとか、そういう家賃の問題に対して、やっぱりこういう事業をやっていくときの銀行の融資の問題とか、事業化するときの家賃設定に対して、私たちはこれを、社会住宅みたいなイメージで考えています。労働者とか母子家庭とか高齢者とかいろんな人が入ってきて、そういった形では、25平米、28平米ぐらいでご夫婦で住むのにもぎりぎり、子どもさんが小さければそういうファミリーもスタートとしてはいいだろうと、単身者としても十分な広さがある。ただし、それは家賃としては5万円はやっぱりどうしてもかかります。それに対しての西成の中でそういった社会住宅みたいな考え方とか行政的な応援があったらありがたいなみたいな、そういうこともお話しできたらよいと思って今日来ました。ちょっと雑然としたお話になってしまいましたけれども、以上です。

○水内副座長 はい、ありがとうございました。

予定、19時10分まで紹介していただきました。残った時間で質疑応答に移らせていただきたいと思いますので、委員の方あるいは委員外の方々、お互いにまた意見交換の時間に入りたいと思いますが、いかがでしょうか。

○寺川委員 本当にありがとうございます。大変興味深く、事例をご紹介いただいて、すごいなと思いました。特に最後にお話しいただいたところなんか、まちづくり発信型の住

宅供給事業というか、地域マネジメントになっているということですので非常に注目すべき事例になっているのかなというふうに感じました。

だから、この特区の中でも地域マネジメント機能をどれだけ発揮できるかというところがやっぱり重要だろうなということを感じています。特にそういう意味でいいますと、うまくいっているというか、こういういろんな事業をされているところで、やりたくてもなかなかできないところで竹中さんはやってこられたと思います。なかなか普通はできないことで、難しいところがあると思うのですが、特に地区の関係とかいろんな制度とかで、これがあればもっと動くのにと感じてもらえることをぜひ伺いしたいと思います。

○竹中さん 実際、建設とか企画での動きをコンサルの先生がずっとやってこられたりとか、それこそ家賃補助制度を施策としてやっていただくような働きかけというのはやっぱり重要なことですし、それを大阪市が制度としてやってくれたというのがすごく大きいかと思います。

ただ、どうしても従前の方の建てかえにしか使えない制度ですし、共同建てかえという条件になりますけれども、建物を建てるということでは、こういったのをいろんな意味で使う手法はあると思います。ただ、実際に運営していくための家賃というのが、行政的に応援してもらうのに生活保護家賃という一つの独立した考え方だけではなく、そういった地域でのいろんな、就労の問題もそうですし、母子家庭の方の支援の問題とか、そういったことと住まいというのはやっぱりセットになっているので、そこが、生活保護という一つだけの制度では難しいと思います。ちょっと余談になりますが、アジュールコートでは、阪神大震災のときに長田で被災されて家族がぐちゃぐちゃになって、お父さんは滋賀の電機メーカーの工場に離婚して行かれるのですが、その時またPTSDというんですか、東日本大震災があったときにフラッシュバックをおこして、仕事が手つかずになって生活保護になってしまい、それで西成に来られて、うちのマンションの張り紙を見て、ここに住みたいということで入居された方がいらっしゃいます。その方は実際に1つ目の就労は失敗しているんですが、2つ目の就労はうまく行って、ようやくケースワーカーと話し合っ
て入ることになり、今5,000円ずつ敷金をずっと返してくれています。生活保護でも、収入の3分の1ぐらいは返ってくるそうなんです。ですから、12万7,000円ぐらいの生活保護費だけでなく、仕事をすればそれなりに収入が増えるということで、徐々に返済に対しては少しずつ厚くするよとは言ってくれています。やっぱり1人が頑張っ
てそういうふう

にやるということを、何か行政的な支援としていけないのだろうかと思います。

○鈴木座長 生活保護から返済しているのですか。

○竹中さん いや、違います。生活保護から返済しているんじゃないくて、生活保護の住宅扶助を丸々いただきながら、共益費は生活費で払っているし、仕事をしている部分については収入認定をされた以外の部分を本人が生活費にしていますので、だから不正はないはずなんです。ケースワーカーさんも、引っ越ししたいなら要はゼロ物件を勝手に探して入りなさいというふうなことを普通言われるんですけども、敷金を払うということをやってもらわないと出るときにそれなりにもめますしね。

○大西さん 入居時に結局敷金を分割でもらうという話にしている、それを返してくれているという話ですか。

○竹中さん そういうことです。

○大西さん その払う金額をこれから分厚く、前より大きく払っていきますねということですね。

○竹中さん 1万円なり1万5,000円なりに稼ぐようになったらしますよというような話です。

○水内副座長 ほかにございませんでしょうか。

○松村委員 今のご紹介いただいた中で、建てかえるための助成がたくさんあって、それを利用されたというのはよくわかります。老朽化した家屋を建てかえるというところでまずそういう段階の助成はあると思うんですよ。

ただ、もう一つ、大事なのは、建てかえた後にそれがちゃんと運営できていくかということです。建てかえたのはいいけれども、そのまま結局採算がとれなかったら、誰もそんなビジネスの後を追わなくなります。今の段階でトータルとして採算がとれているのかどうか、もし厳しい状況にあるならば、それをどういうふうな制度で支えればいいのか、もしくはどういうふうな仕組みがあったらそれがうまく回るのか、どうすれば理想的なまちづくりが進み福祉も含めた住宅が運営できるような状況になるのか、何か現場をよくご存知の立場からご意見はありませんか。

○竹中さん 実際、土地取得から始めてこの事業をやるというのは、逆に制度による建設費補助とかがなかったらまずできないです。だから、そういったマンションオーナーさんにこういう事業をやりましょうよということをこれからやっていくのが僕らの仕事だと思っているんですけども、ただ、言われている運営上の事業採算というのは、あくまでも

それは家賃だけの収入になりますので、銀行ローンといってもやっぱり25年からありますから、正直、左うちわでということは全然なくて、一般の賃貸マンションなりの苦勞をしているというだけです。

ただ、うまくいってるのは、そういった社会福祉法人が確実に借りてくれている部屋があることは大きいです。そういう意味では、逆に民間の一般のテナントが、ばかばか入ったり出たりするような場所でもないんですけれども、結構普通にレストランをやったりとか、私たちの仲間でも何棟目かの建物で古着屋さんをやっているところとかあるんですが、ビジネス自体は決して楽じゃない、むしろ赤字だったりしますね。けれど、全体のマンションが、そういうものがあることにより空室リスクが減ったりとか話題性があるとかということ、私たちも自分のことをひいき目に見て、これがなかったらもっと空室リスクが高かったんだろうと逆に思い直しています。それは逆に、先ほどの住む一人、ひとりに何らかの支援が家賃とかいう形でできないかとか、あともう一つは、社宅とかというコンセプトでマンションをとらえようとしているところもあります。要するに企業が就労支援とセットで本人にお金を給料として払う方法と住宅手当という形で支払う方法で、仲間内でもそういう障がい者の就労支援とかやっているところがありますので、そういったところに声かけをして、その都度でいいと思いますし、サブリースみたいに4室も5室も借りてと言っているわけじゃなくて、その人が入ったときにその企業が例えば1万、2万応援するというふうなことで、私たちが事業収支をとっている家賃をきちっと払ってもらえるようにしてもらおうとか、そんなことも可能じゃないかなということで、企画段階で具体的に声かけしていないですけれども、そんなことも考えてやっています。

○松村委員 大学の教員をやっていると、学生の賃貸事情に詳しくなります。阪南大学の学生が借りているアパートで、18平米あるところなんかすごく少ない。それに、そもそも福祉を前提に建てられているわけではないですよ。恐らく、生活保護で入ってくる方もいてらっしゃるけれども、将来的には例えばそういう福祉と違う層のほうを想定されて建てていらっしゃるわけですよ。でないとならば、新しい人を呼び込む力にはならないし、福祉前提のものではないということですね。そうですね。

○竹中さん はい。

○松村委員 18平米って、でも大きいですよ。単身だったらね。

○水内副座長 ベランダつきですからね。

○鈴木座長 ちょっとよろしいですか。

大変一つのモデルとして新しい展開で、いわゆる福祉マンションとかそういう生活保護相手のところじゃなくて、特養なんかを入れてというのは非常に一つのモデルだとは思いますが、本当に何か持続可能なモデルなのかなというのがやっぱり一番思うところで、このまちってほとんど単身の高齢者で、日雇いと今、生活保護の方がいらして、この方があと20年ぐらいで多分亡くなって、もうそれで終わってしまうというような、何かそういう需要だと思うんですよね。それが子育て世帯とか若者を呼び込むとかというふうに何とか転換できないかというのが一つ、この有識者座談会の大きなテーマで、多分、ボトムアップでやるんじゃないで、上から例えば大学を誘致してくるとか、アートで活性化するとか、あとは観光みたいなもので需要をどんと持ってくるということで引っ張っていけないかというのが一つの大きな発想なんです。

またちょっと話はもとに戻りますが、そういう高齢者向けの住宅で特養を入れたりデイサービスを入れたりするような、結構いい住宅ですよ、この辺の基準からしたらすごくいいモデルだと思うんですけれども、それが何かモデルとしてうまくいかないと、例えば介護とか医療のところでは採算をとろうとする。だからそうだとやっているんじゃないで、一般論なんですけれども、そうするとデイサービスとか特養とかをむしろ入れてきて、その人たちに家賃を払ってもらって採算はとるんだけど、そのデイサービスとか特養は結局のところ上に入っている生活保護受給者のそういう介護の需要とかで採算をとっているんで、ある意味、住宅扶助を飛び越えられるんだけど本当は飛び越えていないと。つまり結局、介護扶助とか医療扶助で採算が合っているようなモデルになっちゃうんじゃないかというのを、ポジティブに評価していいかネガティブに見ていいかというのはちょっと微妙なんですけれども。

○大西さん 実際には共同住宅建てかえという増井マンションというモデルケースがあったんですけれども、これ建てるのは相当大変でして、というのは、もともとそこのアパートに住んでいる人を一旦よそへ移して、それをまたもとに戻してもらうという作業をやったんです。たまたま受け皿住宅という、たまたまというか、そういう施策の中でつくっていただいて、皆さんそちらに一旦移って、つぶして建てかえると。この間、家主さんも余り深くどうも考えてらっしゃらなかったみたいで、例えば建てかえるまでの家賃はずっと自分のところに入ってこないわけですよ。一応家賃設定とかもさせてもらって、僕らが見た限りではかなり厳しい設定に将来的にはなっていくであろうなというところやったんですけれども、思い切ってやりはったと。実際今、彼らも会社の中心になってやったこと

なんですけれども、どう思っておられるかという、前のほうがよかったと一部思わざるを得ない状況が金銭的なところが実際あるんですよ。

○ゲスト それは家賃ですか。

○大西さん そうです。僕らも何でしたのか、そういう話というのは初めなかったの、とりあえずやりますという前提で作業をしてくださいということで入ったんであれですけども、例えば家賃でも、当然、将来的には初めに設定した家賃はどんどん下がっていくという状況の中でしなきゃいけない。しかも同じようなマンションが、その後すぐ彼らの会社の近くにどんどんできてくると。ほんなら当然、先行でいっている建物の賃料というのはそこから比べると相当落とさなきゃならないと。そうすると大体、家賃でいろんな諸経費を払って銀行の返済を終わっちゃうとほとんど残らないです。そして何十年後かにその建物が残ったから何がうれしいんですかという話になってきます。

だから、やはりこういう事業というのは家賃で成り立つんやったら成り立たすだけのきちとした計画がないと、例えばそれを付加したもので何とかしようというのは、それは全然違う話ですし、そうなってくると事業意欲というのは当然なくなりますわ、普通で考えたら。だから、あくまでも賃料で成り立つという前提ですべてを考えていかないと、住宅の場合は。ほかのところでは付加価値が出ますよというのは、またそれはちょっと全然違う話やと思うんですね。

○鈴木座長 なるほどね。その場合、例えば生活保護受給者じゃなくて、今は生活保護受給者が多分すごく相場を張っちゃっているの、それはすごくお持ちになっていると思うんですけども、それよりも改善した住宅で、高齢者が、非常にいいコレクティブタウンですし福祉も整っているの、外から来るというような可能性というのはないんですか。

○大西さん 結局、彼ら管理者、ブランコートというマンションなんかは、入居者という方は実際、地元の方ももちろんいてはるんですけども、例えば難波とかあの辺の業者さんがかまえてきた方とかが結構いてはるんですよ。それはなぜかという、通勤にも便利といったら便利やし、同じようなレベルのマンションにあの地域で住もうと思うと、とてもじゃないが住めないと。今度の多分、マンションもそういうのでやられているところが実際はあると思うんですよ、よそから来てくれるんじゃないかとか。それは我々と今、逆に周りの住宅賃料も相当下がってきているので、都市部というか。だから、それがちょっとバランス的に狂ってきているなという感じはあります。

だから、本当に中心部の家賃もびっくりするぐらい、例えば難波で歩いて駅から何分の

ところでこんな値段で借りられるのかという、以前やったら15万、20万したものがもう8万、9万でも借りられるような状況というのはできてきていますから、その辺は、やっぱりこういう事業をするときにはじっくりよく考えられて計画を立てないと難しいという感じはしますね。

○水内副座長 実際、ブランコートは外から入ってきているんですか、結局。

○大西さん 外から。それはよく。

○鈴木座長 ブランコートは若いファミリー向けですよ。

○竹中さん そうです。資料がありませんが、ファミリー向け2LDK、1LDK、結構広いですね。

ただ、私も最初は本当、大西社長と家賃設定からいろいろ相談に乗ってもらいながらやったんですけども、平米当たりの単価は全体からいうと広くなればなるほど下がってくるので、さきほどのコミュニティハウス萩みたいなの18平米で4万2,000円プラス共益費5,000円の4万7,000円というのがぼんと48戸入ってくるような設定が、事業としては一番かたいですよ。

先ほど言われたサービスつきの囲い込みの話については、確かにそういう空き家ビジネス的に、どこからかわからないけれども退院した高齢者を連れてこられる人たちがいて、そういう人たちがそういった空き家を持たれているオーナーさんに部屋を借りますよともちかけ、そのかわり、そのときセットになって事業所が来て、ヘルパーが来てという、そういうのは実際にはあります。

ただ、我々が一緒に動いている法人とかは、極力、そこは本人の選択の中ですし、下にケアプランセンターがあってもそういう形ではやめておこうと、それこそ家賃で勝負しないといけないという形でやっているんで、相変わらず厳しいです。増井マンションも今、大西社長のところに管理してもらっていて、当時は6万とかという設定もあった部屋が4万2,000円プラス1万3,000円ぐらいの5万5,000円という価格にずっと下がってきて、そこは本当に生活保護の方が出せる、生活費で1万3,000円負担できるというぎりぎりの線になってきています。けれども、そういう部屋については、僕も1人紹介したお客さんが、愛知県から西成で靴のことを勉強したいということで来られて部屋を探しているときに、そのタイミングで増井マンションに空きがあって、増井マンションのグレードで、水準からいうと安いんで、そういう価格に今なってきたものですから、若い人がやっぱりすごく喜んで住んでくれました。そういう意味では、そういうことを目指して住ストックを

よくしていこうという取り組みは、僕は間違っていないというふうに思っているんです。

○松村委員 私のところも両親が大分高齢化しているので、そういう介護とか福祉とかがついているマンションを調べたことがあります、びっくりするくらい賃貸料が高い。20万、30万なら平気で取るようなところばかり。西成には本当にリーズナブルな価格のところがあるんですけども、やっぱり印象の問題ですよ。生活保護の人ばかりが入居しているところに、年金生活の人はなかなか入居しにくいのではないのでしょうか。生活保護向けのマンションはやはり生活保護の人ばかり、私の両親だけでなく地元の方々も、何かそういう印象を強くお持ちだと思います。その辺のイメージを変えて、外から生活保護以外の人も受け入れることを前提に、住宅ストックをつくっていくのが大事だという気がします。

それと、あともう一つ、少なくとも18平米に住宅が改良されていることは、絶対評価すべきです。今までの住宅よりもずっといい条件で建て直っているわけですから。一昔前ならば、本当に福祉目的だけで狭隘な住宅をつくっていたのが、この場合は住宅ストックの質がよくなっているんで、ここは絶対評価すべきです。むしろ、さっきおっしゃっていたみたいに、家賃の設定だけでは、外から人が流入してこない理由は何かという、生活保護とリンクした住宅というイメージが最大の課題なのかなと思います。家賃設定だけで生活保護以外の人も入居するような住居ができたなら、地域の課題も改善していくのかなという気がします。

○鈴木座長 ごめんなさい、私がしゃべったことにちょっと語弊があったんで、竹中さんところが別にそういう囲い屋みたいな業者であるということは全然そう思っていないです。ただ、何か将来的にそういうモデルになっていく可能性がないとは言えないかもしれないし、現にそういうような介護のところで採算をとるようなこともビジネスとしてはありますので、どう線引きするかというのが課題ですよというか、どう考えるべきかというのが、私も答えはないんですけども、一つは18平米とかそういうことかもしれない。

あとは、私もよく、東京で似たような業者がいっぱいある中で、そうじゃない業者の第三者評価委員長とかいろいろやっていたので、自立援助ホームというのがあるんですけども、そのときに思ったのは、やっぱりちゃんとした良心的な業者は介護の選択肢を持たせますよね。だから、介護の業者でいろんな業者が入っているというのが一つ大きな線引きだなとは思っているんですけども、何かうまいこと線引きしないと、せつかくのいいモデルが後ろ指さされちゃうようなことになるので、何かうまいほうに転換できない

かなというのが1点です。

それはそれなんですけれども、もう一つ大きなテーマは、高齢者の住宅を、いろいろ生活保護を受けている人のものが良質なものから悪いもの、いろいろあるので、それをどういいほうに転換するかというのが一つ大きなストーリーではあるんですけども、ただ、もうちょっと射程は遠いんですよ、この議論は。それはそれですごく重要な話で、それもここでやるべきことなんですけれども、もっと先、10年後、20年後をどうするのかというのがこの大きなテーマなんです。そのときに、やっぱり今、単身高齢で生活保護を受けていらっしゃる方々は、言い方は悪いですけどもだんだんお亡くなりになってきて、多分急速にお亡くなりになると。だから、そこをビジネスモデルにしているようなものがどこまでちゃんと新規投資ができるかという問題がありますよね。だから、もし新規投資するんだったら、ほかの地域からそういうような、イメージを変えて、新しい方が安い地域で安く老後を暮らせるということであるようなモデルをつくるかが一つですね。

もう一つは、ブランコートみたいな感じで、若いファミリー向けのものをどこまでここにつくれるかというようなことですよ。行政的にはそこに市税を減免するとかそういうことで何かいろいろ支援を打っていかうというようなことを市長はおっしゃっているわけですけども、私は、それぐらいでは多分移ってこないだろうなという認識でして、もう一つ行政として持っている手だてとしては、未利用地を子育て向けのマンションとかをつくるのに目的を限っちゃって売るとか、何かそういうのは一つ手だてだと思いますし、それから住宅手当みたいな、住宅補助みたいなものを大阪市はどんどんなくしていこうという方向になっていきますけれども、ほかがなくしていくんだったら西成でやるというようなことで子育て世帯が移ってくるんじゃないか。そして、竹中さんがおっしゃったように、社宅というのも一つのいい手ですよ。だから、個人でなかなかイメージが悪いから移ってこなくても社宅で丸ごと買っちゃったというんだったら、それは社の方針としてここに住みますということになるので、それは一つだと思うんです。

いろいろ私も何かそんなことを漠然とは思っているんですけども、どうしたら子育て世帯がこの地域、あいりんは直接は無理だとしても、その周りですよ、長橋とか、津守までいくかどうかはわかりませんが、どういう手だてがあれば子育て世帯が移ってくるかというのは、何かお考えがあったら聞きたいんですけども。

○水内副座長 社長、この間ちょっとちらっと言っていたああいうアイデアいかがですか。未利用地、いわゆる競売の話なんです。

○大西さん 結局、さっきも言うたように、むちゃくちゃな要するに公売システムというか、何も考えんとただ単に払い下げというか、入札、売却していく。安い金額で業者さんがたたいて買う。それをまた利益を乗っけて建て売り住宅にして販売する。それが売れないとまた周りの地域の土地の値段が下がるという悪循環に今もう陥っているわけですよ、特にそっちの鶴見橋、長橋とか出城、旭、あの辺の地域というのは。じゃ、もし、さっき先生おっしゃったように子育て世帯用の何か特殊なものができるのであれば、そういうものを建てていくというのも一つの方向性ではあると思います。

例えば、もし母子だけにするのであれば、そういう方のコミュニティーというか、そういうものもできてくるかもしれないし、その中で学校というもののあり方というのをもう一遍考えなあかんということも出てくるかもしれない。今、今宮のほうに弘治とか廃校にして全部そっちに持っていくという話も出ていますけれども、ただ持っていったって、そこに行きたがる生徒はいるのかと、あるいは行かせたがる親がいるのかという話になってきますから、そこが移ってこられる方の一番根本的な問題になってくるんですね、それは西成というところのイメージというのものもあるかもしれないし。ところが、西成特区というものがあって、そういうところを改善できる、ああ、あそこ行ったらいい学校がある、いい先生がいてるみたいや、じゃぜひあそこで勉強させたいと思わせられるような要するに教育のそういう機関をつくるなり、あるいはそういう人たちが住みやすいような住宅をつくる、大阪市有地をそういうために使うとかというのであれば、それはすごく有効な使い方。何かただ同然でばかみたいに売るよりはよっぽどましやと思います。

例えば、そこに大阪市が全部するのか、先ほど先生おっしゃったように、その用途に限られてどこか開発業者が来ませんかとか、こういうビジネスチャンスがありますよというようなことで引っ張ってこられるのであれば、そこに就労のようなものが生まれるかもしれないですし、そういったことで10年先、20年先をただ単に箱物みたいな建物、マンションを乱立させるとかそういうことじゃなくて、そういうことでつくっていけば、長い目で見たら徐々にイメージというのは変わっていくんじゃないかなと。ある意味、それぐらいドメスティックなことをしないと、全く、こちょこちょしては根本的な解決には何もなっていないような気がしますね。

○寺川委員 そのときに重要なのはだれが担うかということになってくると思うんですよ。例えば、いわゆる業者じゃなくて、その事業をどこが担っていくかというときに、地域であったりどこかその主体性みたいなものがこれから特にこのまちでは重要になって

くるのかなと思うんですね。

そういう意味でいうと、まちづくり発信型というのに注目しているのは、そこがマネジメントできるわけですね。それは、囲い込みではなくて、地域のために事業を興してそれが地域に還元されていくというような、そういう循環の仕組みの中にこういう事業が埋め込まれていくというイメージが今あるんですけども、そういうことなんですかね。

○大西さん　そういうことです。だから、だれがどういう形で実際そこまで大きなことをマネジメントできるのかという、なかなか、ちっちゃい団体でそれができるというのは考えられない。極端な話、大きなディベロッパーみたいなのがまち自体をこういうふうに変えていきましようとかという、例えばそういう案を何社かが出してどれを選択するとか、そのぐらいの企業体、大きさじゃないととてもじゃないけれども無理なんじゃないかという気はしますね。

特に西成区というのは昔から、例えば一等地であっても分譲マンションが非常に少ない地域。なぜかという、ブランドイメージが下がるからといって来てくれなかったんです。ライオンズマンションとか、極端な話。そういう今までの流れも実際あるんですね。ところが、逆に全国から注目されている地域に今やなってきたわけですから、これを逃さない手はないという。

○寺川委員　例えば、コミュニティー・ベースド・エステートのように、地域が事業を興していくという可能性についてはどうですか。今のお話でいうとディベロッパーが入って提案してもらって地域が選ぶとかどこかが選ぶというやり方もありますが、地域が担えるものかどうかというところが悩みどころではあります。そういう意味でいうと、今かなり頑張っておられますが、そのあたりについて、ずっとかかわられていて感じる問題等はありませんか。

○大西さん　ただ、今の規模でやっていくと、またばらばらなまちづくりというか、統一性のないものになるのはもう目に見えています。事業経過としては、やっぱり今でもアジュールコートですか、苦戦している状態なんですね、賃料の設定がなかなか難しかったみたいで。そうなってくると、もしかしたらそこでこの事業自体を一回ちょっととめましようという話になるかもしれない、これはしんどいぞと。そうなってくると、今までやってきたこともみんな中途半端です。だから、やっぱり統一した何かのもとでコンセプトのもとでつくっていかないと、かなりいびつな感じのまちづくりというか、実際てんでばらばらみたいな感じになるんじゃないですかね。

○水内副座長 なるほど、なかなか奥の深い話で、もっともっとしたいところなんですけれども、前半分、7時半を過ぎました。

僕も、社会住宅という言葉はちょっと使ってみたいなと思っています、西成特区内で。ちょっと可能性がある言葉で、ヨーロッパでは使い古されていますけれども、アジアでちょっと今復興気みですので、この社会住宅は何ものかということと、もう一つは、やっぱり市の未利用地というか、この辺の問題というのはやっぱり物すごく抱えていますので、ここをもうちょっとうまく仕切れるような、ちょっと先を見越した土地利用とか考えながら、せっかくいいところにあるものが競売することによって土地の価格を下げってしまうというのはまた雑なまちをつくりかねんという感じがして、将来に禍根を残すと思います。この辺は今日の議論の中での2つのポイントとして、あとはやっぱりハウジング社会企業というのがどれだけ持続可能かというあたりが西成特区の一つの大きな売りかということで、この辺で前半をまとめて終わらせていただきたいと思います。

○雨森さん 1つだけ。

○水内副座長 どうぞ。どうぞ。

○雨森さん 住宅の専門でも何でもありませんけれども、一つお話を聞いていて思ったのは、日本全体的に子どもが減っているという状況の中で、どこの地域も多分子育て世帯を誘致したい、取り込みたいと思っていると思うんです。その中で西成区も同じようなことを目指すのかということとは考えたほうがいいかなとちょっと思いました。

○竹中さん それとあと、すごく現場の実感として、ブランコートの入居者の新婚補助申請をされている方の率が、すごく多くて、あれは大阪市の普通の施策なんですけれども、年2回、印鑑をもらいにうちの事務所に来られます。普通の不動産屋さんにも新婚補助のことをうたいながらそういう若い人を引き込むようなことは、普通にやっておられます。要は、実際に皆さんかしこいからそんな制度を確実に使ってうちのマンションに入っているし、駐車場とセットで家賃を変えてくれないかまで交渉されますから、若い人も結構頑張っていると思います。

○水内副座長 ありがとうございます。

尽きないんですけれども、とりあえずここでちょっと一たん締めさせていただいて、5分ぐらい、ちょっと短いんですけれども、7時48分ぐらいにまた再開させていただきたいと思います。短いんですけれども、どうもありがとうございました。

大西さん、ちょっと所用があり、これでお帰りになられます。どうもありがとうございました。

ました。

(休 憩)

○水内副座長 では、そろそろ再開させていただきたいと思います。

後半戦は、一つのキーワードはアートということで、アートのまちづくりというのは、私も最近学んでいますけれども、非常に新しい取り組みのように思われておりますが、割と空間、スペースというのを使いながら、今日の前半の話ともある種どこかでつながるところがあるということで、まちづくりの企画、多層性というのを見るにはなかなかおもしろいテーマになるかと思えます。

今日は、そういう小さなスペース、商店街の空き店舗を利用してどんなことを今までやってこられたかという話をさせていただきながら、また将来展望も語っていただくということで、まず上田さんからお願いいたします。よろしく申し上げます。

○上田さん 改めまして、ココルームの上田です。よろしく申し上げます。

パワーポイントとレジュメがちょっと違っておりますが、どちらも楽しんでください。

今日は、西成特区構想におけるアートの可能性についてお話をしようと思っております。アートって何というところからまず始めたいと思えます。

美術館の中にあって何だか高尚なもの、あるいはお金持ちの趣味、わけがわからなくて何だか近寄りがたいというような印象もあるかと思うのですが、のではなくて、もっと私たちの生活に根差したものをアートと呼びたいと思うんですね。ご飯を食べるようにです。そして、関係をつなぐもの。人と人、それから人と物をつなぎます。それから人と自然をつなぎます。それから場所もつなぎます。そして、抽象度が高いですが、人と記憶というものもつなぐと思っています。思わぬ発見もあるというのがアートのおもしろいところです。この写真は西成区の中にあるコインランドリーなんですけど、折り紙で埋め尽くされていますね、おもしろいですね。私たちは、アートというより「表現」という言葉をよく使います。「生きることは表現」だと、こんな具合です。

私たちココルームは、2008年から地域内で4つの拠点を運営しています。その紹介をします。

動物園前商店街の中でインフォショップ・カフェ ココルームをまず始めました。インフォショップというのは、大きなメディアが取り扱わないようなローカルなお話やニュースなど、人と話し合いながら対面で情報交換したりするということを指します。世界各国、全国からいろんな人がやってきます。近くはバックパッカーの人たちをたくさん受け入れ

るホテル街ですから、本当に世界中からいろんな人が来ます。喫茶店なんですけども、注文しないでおしゃべりに来る人がいっぱいいるんですね。近所の人です。この人たちが外国人の旅行者や、いろんな人に出会い、大変元気になってきています。おもしろいですね。障がいを持っている人もよく来ます。店内は、けんかもいざこざもあるんですけど、本当に思わぬ出会いが見つがれています。

向かいにはメディアセンターを2009年にオープンしました。こちらは、イメージは縁側です。メディアと言ったときに、大体、機材があってコンピューターがあって技術を持っている人が来てというようなことを思われるかもしれないんですけど、私たちが考えるのは、おしゃべり、コミュニケーションが生まれるような状況をメディアと呼びたいのです。絶対に会わないだろうというようなおばちゃんとかの近所のおっちゃん、旅行者であったり、そういう人たちがメディアセンターの前でおしゃべりが生まれるということもあるんですね。また、縁側ですので、思わぬいろんな相談が持ち込まれることもあります。

それから、ニカイ！文化センターというのも運営しております。ニカイ！文化センターはカマン！メディアセンターの上にあります、本当に2階なんですね。集中して、話し合ったり、トークイベント、上映会などを行います。

そして、萩之茶屋2丁目で、45室のマンションの、管理業務と、そして1階に交流スペース、えんがわ茶屋「こころぎ」というスペースを運営しています。ここでは、住人、それから地域の人が集い、そしてココルームが得意とするささやかな表現の場をつくっています。今は医療関係のNPOの方もここに入られて一緒に居場所事業を行い、また、間もなく訪問看護ステーションの事務所がここに入ることになっています。

私たちココルームは、実は2003年から、新今宮駅向こうの、今は更地となっているフェスティバルゲートで活動しておりました。そこでは、当時から釜ヶ崎地域に少しずつ関係を持っておりました。紙芝居劇団「むすび」という、野宿の経験をしたこともあればリストラ等々で生活保護を受けながらこのまちで暮らす人たちの紙芝居劇団の立ち上げ、そしてサポートをしてきました。

2008年には、ブリティッシュカウンシルと協働しまして、この「むすび」に、イギリスでホームレスの方にオペラのワークショップをしているストリートワイズ・オペラという団体があるんですが、そちらのアーティストに来ていただいて作品をつくって上演いたしました。

今度、2011年は大阪市立大学と協働しまして、ボローニャから仮面劇をホームレスの

方に行っていらっしゃる方に来ていただいて、ワークショップをして、釜ヶ崎のおっちゃんたちと舞台の発表をしました。

また、この年には、釜ヶ崎のおっちゃんたち、それから通りすがりの人たちなどなどを巻き込んで詩のワークショップを行い、参加者自身が詩をつくって、谷川俊太郎さんと飛田会館の舞台上で朗読の発表をいたしました。

こういったさまざまな発表の機会があったのも、実は毎日、コクルームという場を開いて、そこで日常的な関係の積み重ねがあったからなのです。

また、その拠点の運営のほかにも、子どもの施設にワークショップの出前に行ったり、三角公園の祭りのときに習字コーナーや書き初めコーナーを開いて、いろんな人に表現の機会を提供しています。地域の外から来た方にまち案内をして、その後、みんなで、どんなふう感じたか、考えたかということシェアする場を持つたりします。とにもかくにも、このまちでだれもが表現する機会をつくります。

さて、ここから西成特区構想のアートによる振興策、これを考えねばなりません。若手アーティストを誘致するという話があるそうですが、それだけではもったいないなと思っています。安い家賃、アーティストが住む、経済活性するだけではちょっともったいない。それに、もしやみくもにアートによるジェントリフィケーションが起こってしまったら、これはニューヨークで実際にある例ですけれど、貧しい地域にアーティストがやってきたら、ギャラリーができて、カフェができて、おしゃれなショップができて地価が上がってしまい、そしてもともと暮らしていた貧しい人々は引っ越さなくてはならなくなったというようなこともあるんですね。

それに、すでにこれまでこの地域はさまざまなアーティストを魅了しています。案外知られていないかもしれないんですが、森村泰昌さん、釜ヶ崎で撮影されたレーニンの作品です。下の群衆は釜ヶ崎のまちの人々です。お仕事としてエキストラ出演をされました。ありむらさんも写っていちゃいますね。そして、こちらは谷川俊太郎さんも来ていただいて、釜ヶ崎に住むまさおさんに人生を聞き取っていただいて作品をつくっていただきました。このまち、結構ポテンシャルが高い地域なんですね。

アーティストたちは、実にこのまち、この地域の人に影響を受け、刺激を受けています。アートに貢献しているまちだったということです。アートかけるまちは、かなりおもしろいと言えましょう。だから、うっかりアートで振興してしまうのはもったいないですね。なぜならアートはもっともっといろんな可能性を持っているからです。

社会包摂という言葉がありますけれど、イメージの言葉ですよ。具体的に何ということとは余り示されていません。実は、アートの手法というのは、私は社会包摂の方法の一つではないかと思っているんですね。つなぐ、新しい人や考え、価値に出会う。考える。大事ですよ。自己肯定力を高め、回復する。表現する力を高める。表現を受けとめる力を高める。対話が生まれる。友達ができる。案外、このまちの人たち、皆さん一匹オオカミで生きていらっしゃるので、友達がいないそうなんです。私たちの活動の中で何がうれしかったかという、友達ができた、仲間ができたとおっしゃるおじさんが多いのです。生きがいができる。仕事生まれる。ささやかなんですけれど、私たちの場で一緒に折ったり貼ったり、軽作業を手伝ってくれるようになりました。創造する生き方や働き方が生まれる。地域資源の再発見も行われます。おっちゃんたちと一緒にまち歩きをして、こんなおもしろいところがあるよということを発見していく。アートは、まちに対し、人に対し、いろんなことができるかもしれないんですね。

さて、そのために、具体的に、クリエイティブ・シェア／アートセンターを開設したいなと思うんですね。ここで恐らくこの10年、いろんなケアの場が必要だということは皆さん重々わかってらっしゃると思うんですが、そういうセンターがもしできるとしたら、そのなかにクリエイティブ・シェアの場所、スペースをぜひ用意していただきたいと思っています。世界中、日本中、大阪中から社会的起業やNPOや大学やアート系の人々の支店とか支局とか入ってもらって、そしてそこで取り組んだことを社会、世界と共有してほしいなと思うんです。

また、クリエイティブ・シェアは各所に拠点があったほうが良いと思っているんです。地域の中にあつたらいいなと思っていて、それはマンションの1階スペースなどが考えられると思うんですが、居場所であったり、また、さまざまなジャンルがあるんですが、アートのジャンルもいろいろあつたらいいと思うんですね。そこにちゃんと開かれた場があれば、それらを結ぶことによって、よりダイナミックな展開ができるんじゃないかと思います。ぜひアーティストの誘致はしたいと思うんですね。そのうえで、アートの交流の場をちゃんと設置したいと思います。

そして、ニシナリ・国際アートフェスティバルを開催したいです。地域資源を活用し、国内外からのアーティストを招聘し、地域住民も主体的に参加する大規模なアートフェスティバルを開催する。ニシナリ・アートフェスです。もともとポテンシャルが非常に高いので、きっとおもしろい試みができると思うんですね。

このような先駆的なアートの取り組みが行われれば、アートによる社会包摂のモデル化がつついていけると思います。まちとの出会いによって新しいアートが生まれます。

じわっと人々が生き生きして、もしかしたら、じわっと観光に、あるいは減災に、じわっと経済活性に、じわっとまちづくりにきいてくるんじゃないかと思うんですね。

ありがとうございました。

○水内副座長 はい、じわっと心にしみるご発表で、クリエイティブ・シェア／アートセンターというのはちょっと一つ注目すべきあり方かなと、じわっと心に響いております、今。

余韻を残しつつ、次のBreaker Project 2003、雨森さん、よろしくお願ひします。

○雨森さん 先ほども申し上げましたけれども、2003年からこの地域で取り組んでいるBreaker Project、また、その一環で始まった新・福寿荘の取り組みをご紹介します。

Breaker Projectというのは、2003年から大阪市の文化事業として始まった地域密着型アートプロジェクトです。芸術と社会をつないでいくことで文化芸術のすそ野を拡大し、市民一人一人の創造力を掘り起こしていくことを目的とし、多様な価値観が共存する持続可能な地域社会を創造していくことを目指すプロジェクトです。プロジェクトの経緯としましては、2001年に策定されました大阪市芸術文化アクションプランの中の大阪現代芸術祭の一環として位置づけられています。

このアクションプランで特筆すべきは、創造型の文化事業であるということです。文化の支援ではなく未来への文化投資として、また、文化の消費ではなく文化の生産へということをやっております。4つのプログラム展開がある中で、トップアップ事業とボトムアップ事業の大きく2つに分かれておまして、ボトムアップの芸術まちづくり事業の中の1つフェスティバルゲート市民還元事業としてスタートしました。

地域密着型アートプロジェクトについて簡単にご説明したいと思います。

まず、何故、美術館やギャラリーの中ではなく、「まちに出る」のか？ということですが、これまである一部の限られた人にしかアート（特に現代の美術）に触れてもらうことができないという問題意識があり、その課題に対するアクションとして、表現者・鑑賞者双方にとって「有効な創造の現場」をまちの中に開拓していくことがまず1つ目にあります。そして、場所・人・記憶とかかわっていくということ、そこから地域に根差した作品

や活動を生み出していきます。ここで重要となるのが地域住民との「プロセスの共有」となります。効果としましては、地元へのフィードバック（潜在する地域の資源を再発見していくこと）、また外への発信（その一つにはネガティブなまちのイメージをポジティブに変換していくこと）、そして、アートのような異物が地域に投入されることによって多様な価値観や新しい視点でまちのさまざまな課題をとらえていくことができるということが挙げられます。（課題を発見していく（してしまう）という点が、エンターテイメントとは異なる要素の一つだといえるでしょう。）

これまでの活動を通して、ブレイカープロジェクトの手法を具体的に4つに分けてみました。場所を使う、風景を変える<サイトスペシフィック>、地元への聞き取りやリサーチを通して素材を収集することから作品を立ち上げる<フィールドワーク>、住民が主体的に参画する<参加型>、地域の組織や施設と協働する<連携型>今日ご紹介する活動は、この4つの手法に沿って紹介していきたいと思います。

活動エリアとしましては、浪速区の新世界からスタートし、西成の方へと広がっています。このマップでは2003年から現在までの活動の分布図をここに落とし込んでいます。

ではまず<サイトスペシフィック>、場所を発見し、場所を使い、風景を変えていくというプロジェクトをご紹介します。この写真は、2004年に行った阪堺電車の恵美須町の駅と車両をペイントしたフランク・ブラジガンドによるプロジェクトです。

次は、2008年に行いました新世界市場の空き店舗を活用して行ったプロジェクト「まちが劇場準備中」の画像です。長いこと閉まっていた場所をまずは掃除することから始まりました。

こちらの写真は、飛田会館3階です。四十年ほど開かずの間であったところと出会いまして、1週間以上かけて掃除をし、最終的にここで上映会を行いました。

この画像は、同じく2008年に新世界市場のアーケードの照明に作品を取りつけたものです。こちらは、新開筋商店街にハンガーでつくったオブジェを展示しているものです。このハンガー自体は、まちの人に協力をいただいて収集しました。また、山王エリアの女性会の人と一緒に作品をつくるということも行っています。特に2008年はまちの様々な（使われていない）場所を活用した展開となっています。

これも、西成の動物園前商店街で展示した作品の写真です。次は、パラモデルというアーティストによる写真の作品ですが、こちら、この地域ならではの特徴的な場所をアーティストが少しいじることで作品化したものです。この写真に

写っているエキストラの皆さんは、ほぼ地元の方になります。この作品制作は2006年と2010年に行っているんですけども、2010年のほうが断然、地元の方の参加が増えました。右の写真なんかは全員西成区の皆さんです。

地域密着型アートプロジェクトで重要なことの一つは継続です。1年や2年で地元の人と関係ができるのではなくて、継続していくことで地元の方との関係が深まっていくということが、この事例からも見えてくると思います。

次は2つ目の手法、〈フィールドワーク〉、地元の取材などを通して作品をつくっていくという取り組みです。こちらのアーティスト、西尾美也は、このまちで撮られた家族の写真のリサーチしまして、約40件ほど訪ねて集めた昔の写真の中から7枚を選び、同じ場所で同じ人で同じ洋服を着て写真を再現するという作品です。

こちらと同じアーティストの作品です。人も年を重ねることで変わっているんですけども場所も変わっている、風景も変化していることが見えてくると思います。

こちらも、同じく〈フィールドワーク〉による作品になります。このアーティスト下道基行は、このまちで人知れず創作を続けているアーティストをリサーチしまして、その中でも、この人はすごいぞ！という人を何人かピックアップしまして作品を展示するというを行いました。普段は評価されることもない日常に潜む創造性を発掘し、エンパワーメントするということになっていたと思います。

『新世界映像日記』は、主に新世界で2006年に行ったものですが、地元の方が映像で自分の住むまちを映すことで自分のまちを再発見していくというプログラムです。10人以上の方がカメラを持って撮影し、約1分ぐらいの映像が100本以上集まりまして、現在、ウェブサイトでも見られるようになっております。

次は、3つ目の〈参加型〉のプログラムになります。先ほど電車や駅をペイントしたアーティストと同じアーティストですが、日本橋の裏側にある愛染公園と近くにあります日東小学校の遊具を地元の子どもたちや地域の人たちとペイントするというものです。

こちらも参加型のものです。「野点」といまして、陶芸家のきむらとしろうじんじんというアーティストがリヤカーでまちに繰り出して、陶芸屋台なるものをまちなかで開催するというものです。

次は、子どもの要らなくなったおもちゃを交換するという「かえっこ」というプログラムです。このプログラムは、2000年に藤浩志というアーティストが仕組みをつくり出して、今では全国各地でいろんな地域の方たちが自主的に行っているプログラムなんですけ

れども、実際、西成区でも2005年あたりから山王の女性会の皆さんが年1回のふれあいまつりで実施されていたり、その後さらに広がって、西成区では「にしなりかえっこクラブ」というのが立ち上がり、現在は年に数回、西成区内の公園や様々なイベントのなかで開催されています。

では4つ目の、＜連携＞についてです。

こちらは、最近のプログラムになります。山王エリアにありますデイケアセンターみどり苑との連携によるものです。ここでは、着なくなった毛糸の衣服を皆さんから持ってきてもらって、その衣服をほどこいて毛糸玉に戻していくという作業です。今年2月より週2回のペースで、主に山王のお年寄りの方、女性会の方などに参加いただいて作業を進めております。そして2013年には、ここから新しい作品が立ち上がっていく予定です。

連携の2つ目は、今池こどもの家との協働プログラムになります。大友良英さんという音楽家と「子どもオーケストラ」という音楽のワークショップを2月から大体月1回ぐらいのペースで行っております。ワークショップの実施場所としましては、今池こどもの家だけではなくて、南津守小学校でも展開しております。8月31日には、大阪市立大学のほうで開催いたしますこども熱帯音楽祭というところで子どもたちが発表することになっております。皆様、お時間ありましたらぜひご参加ください。

そして、やっと新・福寿荘にたどり着きました。ブレーカープロジェクトの2011年からの取り組みとして、福寿荘という築約60年の木造アパートを創造活動拠点として始動しました。去年は、まずここの大掃除から始まって、梅田哲也という大阪在住のアーティストが約4カ月かけてこのアパート全体を使って作品を制作し、展覧会を行いました。来場者数のうち地元住民が138名、これは、活動エリアの人口(新世界、山王)から割り出すと2.08%となります。

これまでの活動では、最初にも申し上げたプロセスの共有ということで、いろんなりサーチですとか、制作の過程でいろんな地域の人との関わりがあったんですけども、この作品に関してはかなり福寿荘にこもって制作をしました。その中で地元住民の方が138名来てもらえたというのは、かなりつながりができているということが言えるのではないかと思います。

こちらは福寿荘の中、展示風景ですけれども、天井に上れるようにスロープを設置したり、押入れからも天井に上れたり、光と音を使って建物全体を見て回るような展示になっています。こういった作品は、アーティストがこの建物に対する興味関心や敬意があつて

始めて成立するのです。地域資源の発見や再活用に関してアーティストの投入は有効だと思われる。

これも中の写真になります。特徴的なのは、左下の炊事場ですね、昔のままの炊事場が残っています。こういった場所というのは、先ほどの假奈代さんの発表にもありましたけれども、アーティストにとっては非常に創造力を掻き立てる魅力的なものになります。

こちらは福寿荘の間取りになります。現在は、この一つ一つの部屋をアーティストやデザイナーや建築家やクリエイティブな活動をしている人たちのアトリエやオフィスとして使ってもらおうということで募集をかけていまして、この9月からは、ギャラリーをここでやりたいという若いアートディレクターが活動を始めることになっております。

地域密着型アートプロジェクトの効果、役割を、これまでの取り組みの中から整理して書き出してみました。

1つは、文化芸術の裾野を拡大していくということ。

2つ目は、地域資源を再発見していくということ。潜在する地域の魅力だけではなく、課題も掘り起こしていくということです。

3つ目は、日常の創造性をエンパワーメントしていく。市民一人一人の潜在力を掘り起こしていくということ。

4つ目は、人と人をつないでいく（地域の様々なレベルにおける分断を超える新たな回路を生み出す）ということです。

最後に、地域と外をつないでいく、外に発信していくということもアートの役割の一つとして考えられると思います。

西成特区構想のアートの振興策についてですが、1つ目はやはり地域資源を活用した文化芸術の拠点づくり。これに関しては、今日は詳しく説明出来ませんが、大分県の別府で活動するベッププロジェクトがこういった取り組みを先進的にされていますので、参考事例になるかと思えます。ここでアーティストやデザイナーや建築家などの活動の場をつくっていくこと。假奈代さんのプレゼンとかぶりますが、レジデンスプログラムですね、国内外のアーティストを招聘し、滞在、制作をする場をつくっていく。またアーティストだけではなくて、地域住民の方のいろんな活動の場をつくっていくということも重要でないかと考えています。

2つ目は、福祉、教育、まちづくりなどとの連携ですね。それぞれ、目的も違うんですけども、アートが他の分野と連携することで、新たな連鎖が生まれてくるのではないかと

と考えております。現在、今池こどもの家やみどり苑と協働してプロジェクトを進めているのですが、それぞれの施設が抱えていた課題に対し、予期しなかった効果も見えてきています。ただ、アートというのは、まちづくりのためではなく、観光のためでもなく、福祉や教育のためでもない。アートがまちの課題を解決し、活性化するような特効薬ではないということもお伝えしておきたいと思います。アートは見えない課題を掘り起こし、考えるきっかけや場をつくる。自分自身、また社会について考える、思考を誘発するものです。まちの未来を創っていくのは、そこに住む人々なのです。そういう意味において、時間はかかりますが、アートが地域とつながっていくことで将来的に果たす役割はかなり大きいと考えております。

3つ目、長期的な視点による中長期計画の必要性です。アートがまちにあることで、すぐに変化が起こるのではなく、また集客があるとか数字的に評価できる何かはすぐに出てくるのではなくて、長期的な視点でまちの未来をイメージするなかで、西成特区構想におけるアートの可能性を考えていければうれしいなと考えております。

以上です。ありがとうございました。

○水内副座長 ありがとうございました。

お二人とも長年、もう10年くらいこの地域で活動されて、やはり地に足のすわった説得力のある、しかも地域に何か影響力を及ぼしそうな予感がかなり現実のものとして今受け取ることができたんじゃないかなと思います。いわゆる空き店舗あるいは老朽集合住宅のある種ジェントリフィケーションという言葉に近いのかもしれませんが、僕はやっぱり日本型ジェントリフィケーションをしたいなと。それは何かと云ったら、貧しい人を追い出さない包摂型ジェントリフィケーションというのも西成特区の一つの大きな掲げるテーマとして世界にも売れるんじゃないかなと、その試みの一端が見えたんじゃないかなと思っています。

今日は盛りだくさんなんですけれども、次は松村さんから、スライドなしで、資料で説明をしていただきます。

よろしく申し上げます。

○松村委員 私のほうは、まちづくりに生かせる地域資源にどういうものがあるのか、とこのを考える中でお話しをさせていただきたいと思います。

一応、「西成区の今ある地域資源の発掘・発見・発信から地域の再生へ」というテーマでお話しさせていただきます。

スライドの2枚目なんですけれども、西成区に今ある地域資源をもう一度確認してみたいと思います。地元の人が消費して楽しむ施設というのは、例えばパチンコ屋さんなんかはそうですが、比較的近隣の方々が集まります。私がここでご紹介しようと思っている施設はどうではなくて、もう少し外から人を呼び込んでいる実績のあるもの、それがどれほどこの地域にあるのか、それを見ていきたいと思います。浪速区から西成区にかけて、実はそのような施設はたくさんあります。例えば、ここに新世界2座、西成3座と書いていますけれども、大衆演劇の芝居小屋ですね。大体全国に130軒の大衆演劇の芝居小屋があるとされていますが、そのうちの13軒が大阪府にあって、そのうちの5軒が浪速区から西成区にかけてあります。この5つの大衆演劇の芝居小屋というのは、演劇をするための専門の小屋で、いわゆる何とか健康ランドみたいなところの演会場ではなくて、本当に演劇をするための本格的な空間です。

一つ一つの施設のキャパは違いますが、おおよそ150ぐらいから200ぐらいの座席があって、西成区にあるオーエス劇場と鈴成座と梅南座の3つ合わせると恐らく500席ぐらいになります。これで、昼夜入れ替えの2回公演をやってらして、鈴成は少し高いんですけれども、大体1,300円、1,500円ぐらいの入場料、3時間くらいたっぷり楽しめます。それと、驚くべきことなんですけれども、昼と夜の公演の内容が違う。それを一月間ほぼ休みなくやられるので、簡単に言うと、芝居のネタが60本くらいあって、舞踊ショーのネタも60くらいあって、観客を見て入れかえるという、すごいエンターテインメントです。

実は私は、この西成の3座全部を、学生と一緒に見て回りましたが、このエンターテインメントは絶対外国人旅行者にも受けます。十分、今の学生の目線で見ても楽しめるエンターテインメントです。

この500席が常に満杯になって日に2回交代すると、年間で36万5千人もの集客力があります。この大衆演劇に地元の方が行ってらっしゃるのかというと、この有識者座談会の中でも、大衆演劇見られた方は織田さんと原さんと上田さん、そのくらいなんです。地元で活躍されている方でも、大衆演劇の前は通るが、中には入ったことがないという方が多いと思います。では実際どういう方が来られているかというと、当然地元のファンもいてらっしゃるのですが、例えば太子1丁目のゲストハウスには、よく演劇ファンのおばさんたちが泊まってらして、今日は鈴成へ行こうか、明日は朝日へ行こうか、生野区にも芝居小屋があるので、生野の方に行こうか、とロビーでよく話をされているんです。ということで、かなり全国的な集客力を持っています。特に今日なんか、鈴成座でやられる橘炎鷹

さんという座長の誕生日で、誕生日公演ということで、西成のゲストハウスのロビーには、今日は祝儀を弾みますみたいなおばさんたちがいてはりました。

それと動楽亭、これは山王の交差点のところにあるんですけども、桂ざこば師匠が席亭を務めてらして、毎月1日から20日までお昼からの定席で、6人の落語家さんが入れかわり立ちかわりやられます。

それと、西成ジャズも最近注目されています。難波屋で活躍されている松田順司さんとおっしゃるミュージシャンが、中心となってやられています。西成では、難波屋で毎週水曜日、山王交差点の成田屋さんで大体日曜日にやられていて、天王寺区になりますが、c a f e g r a i n f i e l dでも土曜か日曜日にやってらっしゃいます。普通のライブならチャージ料をとるのですが、西成ジャズはそのとき聞いて感動した分を持っているお金で表現するというので投げ銭方式、ただし演奏は皆さんプロで、すごくクオリティーの高い演奏をされています。

そのほかにも、この地域ではエンターテインメントをライブで見られる空間がいっぱいあります。音呑庵さんとかL a z y A n g e lとか、このほかにも、たくさんあると思います。

改めて思い起こしてみれば、大阪のミナミのど真ん中でも、ライブでこれほど色々なエンターテインメントが日常的に見られるところって、実はないんですね。ミナミには吉本新喜劇があり、道頓堀に大衆演劇の小屋ができていますけれども、キャパも小さいし。それでいうと、西成区はもう画期的に、エンターテインメントがまちにあふれている地域と言えると思います。

あと、スライドには「資源化されていない資源」と書きましたが、実は観光という観点から見ると、地域資源は埋もれているままならあくまで石とか鉱石と一緒に単なる資源なんですね。ちゃんと掘り出してきて磨いて初めて資源として活かせるわけで、西成区には資源化されていない地域資源がたくさんあります。例えば地元LOVEな有名人なら、桂ざこば師匠もそうですし、SHINGO☆西成さん、赤井英和さんとかもいてらっしゃいますが、別にSHINGO☆西成さんが毎週公演するようなライブハウスがあるわけではありません。彼の存在は西成の象徴ではありますが、それが必ずしも資源化されている訳ではないということですね。桂ざこば師匠は動楽亭をお持ちなんで、とても貢献されていらっしゃいます。この他にも例えばてんのじ村の碑文が立っているんですが、これも碑文が立っているだけで、必ずしも資源化されているとは言えません。私の目から見ると、まだ地面の

下に埋もれた鉱石でしかないという感じ。あとスライドに書いたのは、戦前の街並みであるとか昭和の匂い漂う商店街。あと「語れない…でも資源」というのは、実は、ここだけの話、域外から来ている集客力のある施設というのは、例えば飛田ですね。全国から飛田には来られています。あと、非合法の博打場、ここにも広く関西圏から来られていて、事実上の集客力があることは間違いありません。それで商店街が潤っていることも、ある程度の潤いがもたらされていることも事実ですね、語れないだけの話で。でも、それは現実としては認識すべきですね。

問題は何かというと、このような地域のイメージをちゃんとプロデュースして、個々でやってらっしゃることを、どういうふうに総体として見せていくのか、というのが実は大事なことなんです。あと「発掘・発見・発信」、要は地下に埋もれているものを掘り出して、それをちゃんと資源化しないと実は意味がありません。どこの観光地でもよくあるんですけども、うちにはこんなもんがあります、こんなもんもあります、とずらっと並べるんですね。でもだれが行くかといったら、だれも行かへんわけです。資源化されていない生の鉱石を並べているだけでは、人は呼び込めません。

西成の場合は、そういう意味では環境的にアクセスもすごくいいし、いわゆる資源を資源化すると、人を呼び込める環境を持っているところなんです。おまけに、何度も言いますけれども、通天閣が近くにあって、ほぼ同じ地域に客が来ているので、ちゃんと資源化できれば、そっちから客を引っ張ってくるというか、流れはつくれるんです、既に来ているのでね。

最後のスライド、3ページですけども、地域イメージの造成で、一つの売り出し方を提案するならば、多分「日常的に多様なライブエンターテイメントで溢れるまち」というのがいいと思います。要は、単体・単発でいろんなことを発信していくのではなくて、集積した多様な総体があるということをアピールすべきです。

例えば今、私のゼミの学生たちが運営している新今宮観光インフォメーションセンターでは、入口に立て看板を立て、五つの大衆演劇の芝居小屋からいただいたポスターを、並べて貼り出して宣伝させていただいています。こういうことが今までなかったんですね。商店街で大衆演劇のポスターを見かけますが、大体最寄りの劇場のやつを1枚張っているだけ。西成にこれだけのエンターテイメントがあるという発信が、総体としてこれだけあると見せることが、とても重要だと思います。

「生き残ったリアルな昭和のまち」という視点も、西成をアピールするにはいいと思い

ます。リアルな昭和のまち、これも大事なのですが、まだ資源化が余りされていないような気がします。

それと、「その両者が密接に関連するまち」という地域イメージも大切です。私はそのような実感をかなり明確に持っています。どういうことかということ、大衆演劇を見に行きはるお客さんは、演劇だけを見に来るわけではなくて、商店街で飲食されます。ちょっと小腹すいたからうどんでも食べて、演劇を見て、ああ楽しかったなど、友達と今度すしを食べに行くみたいな、そういう流れが実態としてあるんですね。必ずしも芝居を見に来るだけではなくて、地域での消費と密接につながっている。商店街と劇場との共生関係があり、これなんか、まちのイメージとしては、とても昭和的で人情味があり、とてもいいんじゃないかなという気がしています。

こういうものは何でも、西成特区の話でよく出てくるんですけども、今から新たに創造しようとしてもできない、でも現実として存在しているものなんです。それを何でもっと自信と誇りを持って、外に向かって発信しないのか、私はそう思います。

それで、今私が考えているのは、とにかくこういうのを発信するには、まずイベントが一番わかりやすいので、「西成ライブエンターテイメント祭」みたいなのをやりたいなと考えています。西成にある色々なエンターテイメントをコラボレーションして、こんなものがあるよというのを発信していきたいと思っています。

それと、もう一つ大事なのは、観光学の専門の立場から言わせていただくと、ちゃんと資源化を行うということが大事なのと、その資源をちゃんと説明できる人間がいないといけないということです。特にこのまちの場合、私は地域と来訪者の間に立って説明できる人の存在が必要だと思います。私も、授業で半年くらいかけてあいりん地区の歴史を語って、現状を語って、最後に学生を勝手に歩かせると、全く違う認識を持って帰ってくることが多くて、驚かされます。やっぱりよく地域のことを知った人間が来訪者に寄り添って歩いて、このまちはこうですよというふうに、まち歩きツアーみたいにして説明すると印象はよくなり地域への理解も深まります。けれども、いくら頭の中でわかっている、現実の現場を見ると先に違う本能が働いて、怖がったり地域への偏見を深めることにもなりかねません。地域と来訪者の間に立って説明する人のことをインタープリターといいます。西成のような街にはとくに、インタープリターという存在が大事だと思います。特にまち歩き観光する場合は、情報発信するだけで勝手に歩くと、誤解や偏見をもたらす可能性があります。まちと来訪者の間に入り、ちゃんと説明できる人間が必要です。

それで、そうするときどうなるかという、結局社会的起業の問題と同じで、誰がやんねんという話になって、やる者おらへんな、みたいな話に常になってくるんですね。

幾つかの提案なんですけれども、まず一つ大きな話は、域外から来訪者を呼び込んで、それがかつ採算がある程度、別に利益を出さなくてもいいのですが、ちゃんとトントンでいけるぐらいのまち歩き観光をやってはどうかという提案です。一時的に助成金や補助金もらってやっても長続きしないので、もっと遠くを見据えて、ちゃんと採算のとれるような形でまち歩き観光をやっていくべきだと思います。すでに釜ヶ崎のまち再生フォーラムでその実験は行ってきました。

それと、ぜひ私が本当にやりたいなと思って、あっちこっちに働きかけ、特に釜ヶ崎のまち再生フォーラムをお願いしているんですけども、「ライブエンターテイメント祭」というのをぜひやりたい。特に今、大阪集客プラン事業というのに西成枠があるので、実行委員会をつくって、別に特別背伸びすることはないので、今やっていることをそのまま、こんなことやってますよと見せるだけでいいと思うんですね。できたらコラボレーションして、夢を語るといろいろあるんですけども、例えばチンチン電車でジャズをやりながら走るとか、1日だけ大衆演劇の中でジャズをやって、大衆演劇の人には外に出てきてもらうとか、いろんなところで働きかけたらできると思うんです。大衆演劇って、どうしても小屋の中でやってらっしゃるんで、どういう実態があるかわからないから、コラボレーションするか一日だけ入れ替える。大フィルの人も嫌がるかもしれませんが、ジャズと一緒にやってみようか、みたいなものがあってもええと思うんですよね。そんな中から何か新しいものが生まれてくるんじゃないかなと思います。

それと、さきほど言ったように、資源化されていない資源の発掘と発見から、それをちゃんと資源化して発信するプロセスを、どこかでポンとスイッチ入れなだめだと思うんですね。西成って、さっき言ったみたいに、勝手に入ってくると、資源を資源のまま並べて見せると誤解されることが多いまちです。例えば飲み歩きマップみたいなものをつくって、勝手に飲み歩きに行ってもらいと、多分、印象いいことと悪いことが、半々ぐらいやと思うんです。ところが例えば、地域をよく知っている人間と一緒に飲みに行くと、すごく印象をよくしてリピーターになります。私のゼミで運営しているTICには、この座談会にも来ていただいた西口宗宏さんがよくいらして、二十歳超えた学生ボランティアを飲み連れて歩いてくれるんですけども、大体みんな大の西成ファンになって、それから居酒屋を飲み歩くようになります。そういう魅力のあるインタープリターと、実際に地域を良

く知る人間と一緒に歩くのがいいような気がします。

例えばモデル的にやるのならば、飲食と大衆演劇とを組み合わせるのもいいかと思います。まち歩きも、プログラムを組んで、はいどうぞというだけでは多分参加者は少ないし、参加しても誤解されるので、最初はインタープリターが付いて回るような助走期間を設けて、イベント的に組んでいく必要があると思います。

あと、商店街の活性化について話をさせていただきますと、要は商店街の方も、本来、自分自身が事業者なので、自分の商売のことで精いっぱい、なかなか余力がないし発想も出てこない、というのが現状ではないかと思います。そういうことでいうと、商店街以外の人も含めて、萩之茶屋の拡大会議ではないですけども、ああいう形でいろんな人間を入れて、話し合う場をつくるのが大切だと思います。例えばイベントしたい、といったときに、「いや、うちそんな人間おれへんわ」となりがちですが、その話し合いのなかに、例えば私たちがいてれば、阪南大学の学生と一緒にしてお手伝いさせてもらえますよとか、どんどん発想が盛り上がってくると思うんです。

今までのような狭い範囲や仲間うちで考えると、どうしても新たな動きは期待できないので、何か商店街の人と例えば大学とか、それこそアートをやってらっしゃる方なんかと、一緒に円卓で、月一でも半期に1回でもいいので、来年どうしよう、何かイベントしようか、みたいな話を話し合う場ができれば、色々と新しい発想もわき行動に移せると思います。

そういう場をちゃんとつくって、そこに行政も入って、私がこの座談会の3回目のときにお話ししたみたいに、空き店舗をどうするのかというような話も、そういうところで話して行って、いろんな見方をする人間が一堂に介して何か物を決めていくというシステムをまず立ち上げれば、色々と新たな展開が期待できる気がします。

ニューヨークのハーレムでどういうことが起こったのかというのを私もよくわかっています。よく外から来た人が勝手に物を見ると失礼だという話もあるのですが、エコミュージアムの概念やコミュニティ・ベースド・ツーリズムの概念でいうと、地元の人って自分の地元のよさって、あまり気がつかないんです。それが当たり前だと思っているから。けれども外から来た人がそれに「えっ」と驚いて、「いや、これすごいやん、おもしろいやん」という話になって、初めていろんなことに気がつくことが多いのが実態です。そのうえで、特に地元のことを地元の間人間が語り出すようになると、それが自己肯定にもつながってくるわけですね。再生フォーラムでやっているまち歩きの「おっちゃんガイド」なん

かもやっぱりそうです。自分たちのことを語ることによって、自分の位置をちゃんと確認できて、それを人に語ることによって反応があって、それが自己肯定にもつながっていくということです。

いろんなものを勝手に見せるというだけの発想やなくて、自分のまちを再発見して、それを再認識して、どうでもええなと思っていた「ほこり」が自分の「誇り」に変わってくる、プライドに変わってくるというところがあるので、まち歩き観光の事業化はぜひやっていく必要があると思います。

もう一つ気をつけなければならないのは、今、新世界なんか食のテーマパーク化が進んでいるのですけれども、放置しておく、例えば昭和のまちというイメージができると、その昭和のまちというキーワードでどんどんと都市空間自体がテーマパーク化していきます。例えば新しく商店街で店舗をつくるときに、意図的に昭和風にして古くやりかえたりするわけです。そういうのってある意味で貧困な精神で、むしろちゃんと語る人がいれば、別に古い商店街の中に新しいものがあったとしても、何の問題もありません。コルムでもそうですけどね。ここはこういう文脈で、こういうふうな思いを持ってこういう方が来られて、こういう活動をしているからこうなっているんです、というのをちゃんと語れば、それ自体が資源化することになります。だから、そういうふうな、イメージに沿ってまちをつくるのではなくて、ちゃんと語れる人間を養成して、それでイメージをつくっていくという技量を持った人材を養成していくのが大事かと思います。

私の話は、総体的に今あるものをどう使うのか、その中でも特に、アートも新しく取り入れるべきですけれども、現在、ライブでエンターテインメントを見られる施設というのが既にあるので、これをうまく使えば、年間40万人ぐらいの集客につながってくる、というお話でした。おまけに新世界からも人の流れをこっちへ持ってこられるという芽があるという意見です。以上です。

○水内副座長 今日皆さん、ばっちり時間を守っていただいて。

すみません、5分だけ私が、皆さんのお手元にあります最後の3ページの資料でちょっとだけ話題提供をさせていただきたいと思います。

お手元の資料の一番、今の松村さんの次に、西成区役所における西成区イメージアップ推進事業というのがありまして、これは、もともと区役所さんがつくっていただいたたたき台がありまして、下線部を水内が加筆したということですが、たまたま今日の後半の議論の流れにある種合うし、一つの提案もできるかなと思いますので、いわゆるソフ

トの面で既存のある資源をどううまく見せてイメージアップすると同時に、どう学ぶかというか、この辺が非常に大事なかなと思います。その辺の学びの場というスタンスというのがやっぱり西成というのはすごく強調しておきたいかなと思っています。

「背景」という文章で、要するにあいりん地域でもしやられると、今回の座談会でもマイナスのイメージが先行しがちだと。しかし区民の思いとしては、そういう期待もあるとともに、マイナスイメージをまた上塗りしていくんじゃないかなという懸念もあるという文章になっているんですね。

私はつけ加えたんですけれども、一つは、今までずっと、後半では隠された魅力とか新たにつくっていく魅力、今と違う形でつくっていく魅力を生産し、また発掘するということ、これをどう伝えていくことが非常に重要だということがまず1点です。

それからもう一つは、やっぱり僕たちはマイナスイメージというのをちゃんと学んどこうよということはいたいです。特に水俣差別じゃないですけれども、地域の名前が差別になるというのは本当珍しいんですよ。西成差別というのは、昔調査しましたけれども、歴然としてありました。なので、やっぱり歴史の理解と地域力を鍛えていくという2方面からの推進事業じゃないと、単なる上滑りのイメージアップ推進事業だけではちょっと僕は物足りないというふうに思っております。

現状で、下線以外は西成区役所さんが挙げていただいたところでございます。これはこれで僕は非常に納得するところでありましてけれども、ちょっとつけ加えたのは、松村さんのアイデアとかやっていると、今の話、今の西成ジャズ、B級グルメあたりが入ってくると思います。それから、いわゆる歴史的景観という、そういう都市の100年という歴史が昭和の景観という形で今言われているわけですがけれども、その一つの売りはあると。それが一つの密集市街地の路地、石畳、空堀や中崎化と書いているけれども、天下茶屋もそんなのが最近起こってきていますけれども、ここは使うべきだろうかなと思います。こういうのはいわゆるいい意味でのジェントリフィケーションだと思います。

それから、やっぱり移民のまち西成という言葉をもうちよつと言うてもええんとちゃうかなと思っています。在日、沖縄、奄美出身者というだけでなく、あちこちから、主に西日本から来ているさまざまつながりというのが、ある種、在日とか沖縄の場合は地元組織とか事務所とかあって見えているわけですがけれども、そういうこともきっちりつないでいってやってみたい。今回の座談会ではこの辺の外国人というあたりはちょっと抜けているなという気はしているんですけれども、移民のまちのよさというか、そういうもの

をどう見せるか。

それから、ここは旧集落としては勝間村、津守新田村というのがありまして、どっちかというところ今の岸里の北あたりまでは今宮村と木津村なんですね。今宮村、木津村は今、浪速区が中心ですから、そういう意味では勝間とか津守新田ということはどう考えるか。しかし、勝間村というのはすごい地域ブランド、独特の地域ブランドかもしれません。その勝間が嫌で玉出に名前を変えたというような話もあって、連綿と続く、三百何年ぐらいの勝間商人というのがあるんですね。そんな話も西成にはあります。それから、十三間堀川を掘る、木津川を掘るということでもいろんな歴史が埋め込まれているところですので、この辺も学びたい。

地域差別というか、勝間も関連してきますけれども、きっちり学べる研究や運動の系譜もあるので、これをちゃんと使っていきたい。要するに、ここまでのいろんな研究が入ったり過去を振り返るといった伝統があるところってなかなかないんですね、逆に言いますと。普通のまちでこれだけできません。ですから、そのできないことをやっぱりきっちりと言言して行って、これが別にマイナスイメージというよりは、これは学ぶのが当たり前だという、いわゆるヨーロッパの子どもたちがいろいろ、特にドイツなんて都市をそういうふうにして学んでいきますね。戦争からどうなってどうなったというのを、地図を持ちながら一生懸命学んでいく。地域をよく知っているというのがよき理解のある市民、市民力をつけていっていますから、そういうのを学んでいったらいいんじゃないかなというふうに思っています。

それからその下に、結局、マイナスイメージの成り立ちを学ぶことから地域力を高める試みというのは全く取組まれなかったし、これ、外国人というのはこういうことに物すごく大きく関心を持っているなということ、いろんなツアーとか研修をやってわかってきますので、その辺も含めて海外発信もできるんじゃないかなというふうに思っています。

今後の取り組みとして、参加型のメディアということで、いろんな、これはもう松村さんとか假奈代さんとか雨森さん言われたことともかなり関係してきますのであれなんですけれども、下線部の下から4行目ぐらいに「地域内外の交流を促し、西成の魅力的なコンテンツを発見・共有・アーカイブしていく」と。そこにちょっと一つ大学というのはやっぱりかみたいなど。私、大阪市大ですし、松村さんは阪南大におられますし、実際にベースを持っていろいろ活動されていますから、例えば西成情報・アーカイブ館みたいなもの

を設立して、これは別に、さっきの假奈代さんのクリエイティブ何かと一緒にネットワーク型です。要するに、いろんなものがあるって、それをネットワークしながらまちの資源も生かして地域的なものを持つと。加えて、区政に関するデータ収集、分析の拠点というか、区政がやっていることをどう見せるかということも非常に重要なんですよね。数字は別にして、地図をベースにしていろいろ語っていくというようなことも、これドイツがよくやっています。やっていることを地図にして、ここにちゃんと市の職員さんがおって、その市の職員さんは物すごい出入りが激しい人なんですけれども、説明ができる、ある種聞くこともできると、そんなものもつくっていったらどうかなという感じがしております。

最後、めくっていただいて、そういう仮称西成情報・アーカイブ館みたいなものを、いわゆるイメージアップ作戦とも結びつけつつ、アートも結びつけつつ、今の松村さんの言われたことも結びつけつつ考えると、これ、けさ速攻でつくったので思いつきもええところなんですけれども、機能として、西成区の都市形成の歴史、大変ユニークな個性のある都市の歴史を見せる資料と写真、実はたくさんあるんです、これ。近郊農村から近代都市のつぼへと一挙に変化したところで、実は別荘地としての流れの話もあります。地図も、天下茶屋なんていうのは大阪で最初の別荘地としてつくられたところなんですよね。そういうさまざまな大阪の都市の典型的なものがもう本当に細かく見られるところであるので、ここに書き込んであるようなさまざまなものを、スタディツアー対応の社会的歴史的ミュージアムみたいなんができないかなと。

見せるマテリアルはたくさんあって、私、都市研究プラザにおりますけれども、釜ヶ崎アーカイブで今あいりん資料室というのがあるんですけれども、そこに8,000点、もっとありますか、4,000点ぐらいのたくさんの資料があって、それも全部データベース化しております。上田貞次郎写真コレクションとあって、大阪市のさまざまな都市史の写真があって、その中に西成の写真もたくさんございます。それから、上畑さんという労働福祉センターにおられた方の8,000点以上の写真集というのもアーカイブしてあって、デジタルファイルがすごくあって、これ、一部あちこちで今展示されていますけれども、貴重な現物、貴重書、それから地図というのもたくさんございまして、こういうのを見せていくという資料をちょっとつくってみたいなど。

幾つかスペースはあると。もちろん英語対応にするわけですがけれども、スペースも、まちかどスペースを有するところで幾つか当てもありますし、これをネットワーク化しておけば、もちろんカマン！メディアセンターも入ってくるでしょうし、新・福寿荘もどこか

で入ってくるだろうしということになっていくと思います。センター・オブ・センターみたいなんは要るかと思いますがけれども、もちろん、汐見橋線、阪堺線みたいな動くものもたまにはスペースになり得るなということですね。

それから、スタッフとして、ネットワーク化されたサブセンターは既存人的ネットワークに乗せてもらうが、要するに動ける人は結構おられます。多分、西成の方はいけませんが、何かのマッチングファンドも必要だろうということで、人とスペースと資金ということに関しては西成特区的にどこで用意するかというあたりをちょっと詰めていきたいなど。そのためには、このスペースというのは幾つかあります。これが大学の講義でも出ると、大学誘致というのをまず先手を打ってこういうところでしていただいて、大阪全体の大学でも使えるというか、そんな試みもできるんじゃないかなど。要するにエコミュージアムとも近いんかもしれませんが、ミュージアムネットワークを利用しながらさまざまな企画、分担、発信するというあたり、例えばクリエイティブ・シェアセンターあたりとの連携とか、そういう組み合わせもやっていくあたりは、非常に実現性はないことはないなというふうに思っております。

ちょっと雑駁な紹介になりました。5分だけとって思っていたので、10分しゃべっています。すみません。実は10分しか残っていないんですけども、ちょっとだけ延長させていただきますけれども、いろんなアイデアが出ておりますので、どうぞ自由に、ご意見伺いたいと思います。

○ありむら委員 4人の方が本当に素晴らしい話で、私も聞き入ってしまっていて、もう何も言わないで帰ればいいんですけども、一言ぐらいは言わないといけないんで言います。要はもともとの下地として、このまち西成は、あいりんもそうですけれども、すごいモチベーションをもたらすものがあるわけですね。それを今まで、ネガティブな事件があった、どうのこうのという報道が先行していて、非常にマイナスなイメージでいかにやられていたかと。本来掘り起こすべきものがどれほどあって、その辺を怠っていたかというようなことになりますよね。

話をちょっと挟みますと、私も釜ヶ崎に来てからなぜ漫画を書き始めたかといったら、そういうところに触発されて、人間が持っている力というのか、どろどろの、生きていく上での、もがいているときの力というのか、そういったものをとにかく表現したいということで始めたんです。だから感じるどころはとにかくあるんですよ、その辺で。スタディツアーなんかでもおっちゃんたちに自分の人生を語ってもらうと、自分の生きてきたいろ

んな苦勞も肯定的にとらえられるようになりますし、それによって自分のまちを見直すというか。そういうことも感じているみたいです。そういうことに参加しないことには絶対につながらない人たちとつながりますので、そのことをとてもうれしいと言ってくれます。学生たちが後日、レポートを書いてくれるんですが、とても励ましになるし、彼らは本当にこのまちにリスペクトを持って帰っていくんですよ。そういうことを大きな事業にしていくべきだと私は思っているんです。

それで、今さまざまの方が言われたことのうち足りないのは何かと言うと、実はいろんなものがそろっているんですね。そろっているんだけども統括する仕組みがないんだと思います。統括する仕組みがない。だから、この辺は松村委員と水内委員がおっしゃったことの繰り返しになるんですけれども、一つは、アートだけじゃなくて、エンターテインメントも歴史遺産も全部、ソフトでまちおこし戦略会議みたいなものですね、そういう大きなものをまずつくる必要があるんじゃないかと。これには、行政も入りますし商店街も入りますけれども。それから住民組織も入りますし、大学も、それから誘致しようとしている新大学であるとか留学生会館なんかも入れればいいし、もちろんアートNPOは当然そうだけれども、仕事づくりのNPOだって入ってもらえれば良いと。とにかく大きな戦略を束ねて、それで地域を興していく。区民の皆さんが期待しているのはイメージのアップだと思うのですが、これこそイメージのアップになりますし、そういう意味では取り上げやすい、やりやすいことでもあるので、それをまず立ち上げる。

それからもう一つは、そういうことが地に足がつくように、水内先生がおっしゃったような場の力としての釜ヶ崎アーカイブですか、これをつくって、その中に、できればその戦略会議みたいなのをそこで開くようにすれば、歴史遺産とアート両方がくつつくんじゃないかなと思っています。

いずれにしても、私、社会的起業の話のところ、とにかくそれを実践する人たちが絶対に要るんだと、それが足りないんだと言いましたように、そういうアクションをとにかく起こすというか、そういう主体というのを呼び込んでいくということですね。それを体系立ててやっていくというところが必要かなと思っています。

細かい話ですけれども、ほかの地域ではこんなんやっているのかなと思って、インターネットだけの簡単な検索ですけれども、横浜の寿町では2008年から寿クリエイティブ・アクションというのがあって、簡易宿泊所を使ったりしていろいろやっているようですけれども、どうもまだ個人が立ち上げたNPOがやっている段階かと。まあ頑張ってい

るんでしょけれども。上田さん、やっているのかな。今、私が提案したような地域総体で取り組むというような戦略性を持ってやっているのかな。そうでないように思うんで。

○上田さん そうですね、マンションの階段で4階、5階って足の悪い方が住めないじゃないですか。それで、その部分を借り上げて内装を変えて、幾つかのホテルを登録し、一つの窓口をつくって旅行客を入れている活動と、そしてアートの活動と合わせ持つてというような感じなので、全体は、まだこれからだと思います。

○ありむら委員 ごめんなさい、長々となって。簡易宿泊所の存在とか密集しているということは、アートにとってはすごい僕はプラスに働くと思うんですよ。

次に、例えばときわ荘プロジェクトなんていうのがありますよね。これは東京でやっているんですけども、何と第21ときわ荘までできていて、一つ一つが大体6つから7つの部屋で全部満室になっていて、漫画家志望の若者たちがそこに移り住んでいます。そして、そこに大きな雑誌社の編集者が協力して、ノウハウのいろいろな助言とか作品の出口としての同人雑誌とか、一般の雑誌への持ち込みとか、そういうのを支援するかなり手厚い仕組みができていますね。私、これなんかは大阪ディープサウスときわ荘プロジェクトみたいな、独特のものができるとは思っているんですよ、うまくやればですね。それぐらいこの地域にはポテンシャルがあるということを感じております。何よりも、今言ったときわ荘プロジェクトみたいなのは、若者がそこへ来て住むわけだから、そういうようなのもいいんじゃないかなと思っております。

ちょっと長くなってしまいました。もうやめます。

○松村委員 いろいろ案はあります。例えば熊野古道で語り部の会があります。あれみたいな感じで西成区民の力を借りたら良いと思います。西成区を語りたい人もいてるでしょうから、そういう人たちに、例えば今、水内先生が考えているアーカイブのような、要は勉強会を開いて、その勉強会も、単なる市民大学的な勉強会ではなくて、それを他者に向けて語るというような人材を養成するような場にすればいい。そして大衆演劇も見に行ってもらって、歴史も知ってもらって、半年ぐらいかけてちゃんと養成してちゃんと語れるようになったら、外から来た来訪者にプロとして語ってもらえば良いんですよ。区民の力を借りて、何か西成語り部の会みたいなのができればいいですね。阪南大学の同僚の吉兼秀夫先生が、「自文化の自分化」という言葉を使ってらっしゃいます。自分の文化を自分のものにする、という意味なんですけど、それがちゃんとできれば、次はそれを他者に向かって語ってもらい、それを上手く事業として運営できればいい訳ですよ。

例えば、新今宮の駅に何かブースをつくって、飲み歩きしたい人がいればそれを連れていく、みたいなまち歩きツアーを定期的に行う。そうすれば、それが社会的起業にもつながります。西成はとにかくマイナスイメージで見られがちですが、西成のよさを自分が他人に語ることによって、再認識することにもつながると思います。

具体的にそういう語り部の会みたいなのをつくるのに、お金なんか大してかかりません。講師報酬料が2万円で10回だと20万くらい。それで西成語り部を養成して、何かツアーを組めるような状態に持っていく。多分1年でできます。それが事業にもつながるし、語り部の人たちの自分の地域に対する誇りにもつながるから、すぐにやったら良いのという気がしますけどね。

○上田さん 例えば、沖縄の例でもご存じだと思うんですけども、語ることによって実はすごくやるせなくなっていくという、トラウマを抱えてしまうという事例もあるんですよ。片一方では元気になっていくというのも実際知っているし、私も実際はわかっているんですけど、どこか何かボタンのかけ違えがあったときに、自分の体験を幾ら語っても戦争はなくなるし…というようなおもいもあったりするわけですよ。だから、その場合どういうことが重要なのかといたら、新今宮駅のところに語り部してまっせというのではなくて、多分、ちゃんとまた間をつなぐ人が必要で、ここに来て歩いて学びたいという人をちゃんとサポートし、そして語る人をサポートするような存在をきちんと入れないと、やっぱりまずいんじゃないかなと思います。

○雨森さん 語り部についてですが、おもしろいと、いいと思うんですけども、語り部の人たちだけが語るのではなくて、まちを歩いていったときにまちの人たちが自分のまちを語れるという、そういうことも大事かと思います。結構、大阪なんで、皆さん気軽に外から来た方にも話しかける方は多いですし、そういう方たちが生き生きと自分たちのまちのことを語れることは、とても地域を外に向けて発信していくときに強みになると思いますし、それが地域の魅力にさらにつながっていくと思います。

なので、語り部の人たちがまちを案内しつつ、まちの人たちがちゃんと誇りを持ってまちを語れるというイメージを10年後とかに見据えてやっていけたらいいのかなと思っています。

○寺川委員 大分盛り上がっているところに水を差すような話になるかもしれないですけども、ストックをどう活用するかというところがかなりこれから重要になってくると思うんですね。例えば先ほどの福寿荘もそうですが、その建物をどう活用するかというアー

トの視点での活用の仕方もあるんですけども、建物としての問題というか、防災上を考えたときのまちの課題というのはどうしていくのかというのをどこかで整理していかないとなりません。民間ベースでできることもあるかもしれないけれども、公共と一緒にやっていく上ではちょっと避けては通れないところもあるだろうと感じます。今の建築基準法では、ストックを活用しにくい制度になっていますよね。今度の改正で既存ストックが使いやすくなるということを言われていますけれども、一歩進むための手法や施策的方向性等において、ストックをどう活用するかという視点を押さえておかないといけないのかなと少し感じました。

それともう一つは、イベントとか企画というのは、このような形でイメージや案がどんどん出てくると思います。ただし、この会議もそうですが、再度、区民や住民さんからこのような発想が出てくる機会をつくっていくことが重要だと思います。どうしても我々の立場ではこういう提案ができますよ。と言ってしまいがちですけども、本当はまちの人もいっぱいいろんなことを考えてはるので、それが形になっていくという、何かそういうプロセスを意識した仕組みをつくりことが、またそういう活動が生まれやすい環境を整えるということも大事だと思いました。

○水内副座長 ほかに。ちょっと時間オーバーしていますけれども、どうでしょうか、ないでしょうか。

盛りだくさんで、本当言うたら2回に分けてやりたいぐらいのところでしたが、後半に関しても、今、寺川さんが言われた、特にストックをどう生かすかという話なんですね、後半の場合はね。この場合、ヨーロッパと決定的に違うのは、ストックが建築的に、建っている分に関しては何とか黙認できますが、手を加えるというときにいろんな規制がかかってくるというあたりがかなりしんどいところで、これが特区で、そこが乗り越えられるんかというとなかなか難しいところかと思いますが、基本的に5年、10年というまちづくりの中でストックの生かし方というのは物すごく注意しながら、しかし魅力的でもあると思いますので、今後ともこういうストックを生かして人の力をつけていくということは、安上がりとは言いませんけれども、ある種効果はあると思います。今後とも特区の中でも一つ重要なテーマとして取り上げたいと思いますので、つたないですけども、僕の司会はこれで終わらせていただきます。

○鈴木座長 冒頭で、まちづくりとか商店街の活性化とかそういう話も今日出るというふうに言ったんですけども、ちょっとそれをやっている余裕は全然なかったもので、これは

9月15日に防災も含めてしっかり寺川先生のほうからご発表いただくことにしたいと思いますので、それはなかったということだけ言い添えたいと思います。

○水内副座長　そうですか。

そしたら、どうも今日はご出席のほどありがとうございました。それから、ご清聴いただいてどうもありがとうございました。

次回は、8月27日の夜に、今までの経過を区民の方にお知らせするというシンポジウムがございます。

それから、9月3日に第11回の有識者座談会がございますので、またウェブ等をご覧ください、皆さんご参加賜りたいというふうに思います。

○ありむら委員　ごめんなさい、ちょっと補足を一つだけ。社会起業家カフェというのをやることになりました。この前の回の社会的起業の話のところ、人材を、どうやって実践する人たちをあいりん地域に投入するかという点で、NPOの中間支援組織を介在させてはどうかと私、提案したんですけれども、言いつ放しじゃだめなので、早速、中間支援組織の一つに声かけまして、9月24日に社会起業家カフェという形で、西成プラザでの開催を予定しています。鈴木座長にも来ていただいて、社会的起業の方面からの発想とか助言とか、そういったものも取り入れていくアクションをとりましたので、補足させていただきます。

○雨森さん　最後にいいですか。

西成特区構想の座談会の委員の皆さんがそう言ってらっしゃると思うんですけども、特区構想の中にアートの振興というのが入っていますよね。にもかかわらず、アートの専門家、有識者がこの座談会にだれも入っていないというのは、今後まとめていくときにちょっとバランスを欠いているのではないかなというふうに感じております。

以上です。

○鈴木座長　ちょっとだけお答えしてよろしいですか。

有識者座談会というのは、器をつくるというところなので、器の中身をこれから詰めていくのが、有識者座談会でこういう方向性で行きましょうと言って打ち出した後に中身を埋めていくという、中身というか、例えばアートを振興しましょうと大体の方向性をつけた後に、その具体化はむしろ行政のほうでまた別の会議をつくっていったり、やり方はいろいろだと思いますけれども、そこで補おうと思っていますので、この場でその話が終わりということではないということだけちょっと申し添えておきたいと思います。

○事務局 どうも長時間ありがとうございました。

本日の有識者座談会はこれで終了なのですが、今、先生からお話しありましたように、西成特区構想を考えるシンポジウムを8月27日月曜日の午後7時から、隣の建物であります西成区民センターで開かせていただきます。

それと、9月については有識者座談会をあと2回開催予定しておりまして、調整中でございます。9月3日18時からと、9月15日、土曜日ですが14時から、この日は4時間の予定で、この12回をもって最終の予定になっております。正式発表はまた後日させていただきますので、よろしく願いいたします。

どうも本日はありがとうございました。